慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世丁香傳播考
Sub Title	
Author	岡本, 良知(Okamoto, Yoshitomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.1- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世丁香傳播考

岡本良知

目次

序説
一、モルッカ土人の傳説
二、支那人の丁香の智識、漢代より南北朝時代まで
三、唐宋時代
四、元代支那とモルッカとの交通
五、西方人の丁香に關する智識
六、丁香の名義に由る考察
結語

序説

丁香は現今世界の熱帶圏内の諸地方に作られる。殊にアフリカ東岸のザンジバル島及びペンバ島より多く出る。現時の丁香は香料としてさ程貴重視せられてゐない。然るに十七世紀以前に於てはその原産地たる唯一のモルッカ諸島に産して他に作られず、その珍重の程度も頗る高かつた。十六世紀十七世紀に於けるポルトガル・エスパニヤ・オランダ・イギリス諸國の船が爭つてこの諸島に赴いたのも、諸島

領有のために殘忍な爭奪戰を敢てしたのも、皆その目的は香料を舶載し、或ひは獨占するためであつた。ヨーロッパ人の航海・發見以前、卽ち太平洋・印度洋沿岸の諸國に未だ彼等の足跡が達しなかつた悠久なる中古の數世紀間に丁香が如何にして如何なる徑路を以て香料諸島より世界の諸地方へ運ばれたかは頗る興味ある問題である。

この問題は一方では丁香を舶載使用した東西の諸國民の香料史を究め、他方では丁香の原產地たるモルッカ土人の記錄または記憶を徵して以てそれを明かにせらるべきである。我等も勿論この兩樣の手段をとらうと欲するのであるが、モルッカ土人の傳說が甚だ興味多いものであるから、それを前提として揭出し、然る後東西の文書記錄に照してその傳說が如何なる程度まで眞實を語つてゐるかを檢するの形式に由らうとする。

一、モルッカ土人の傳說

後にも述べる如く、モルッカ諸島に於ては上古・中世を通じて文字がなかつた。それ故に彼等の間の故事を傳へるものは古來より承け繼がれた說話である。その說話の現代に記し殘されるのは、主として後世に渡航・交易をなしたヨーロッパ人の採收によるものであり、而かも彼等の留意は唯古來彼等の貴重した諸島原產の丁香のみに集中したのであるから、丁香發見の起源・その經濟價値と舶載の沿革とを

中心とするものに限られてゐる。併し、專ら丁香傳播の經過を研究しやうと欲する我等にとつては頗るそれは好都合であり且つは甚だ興味多いのである。

さてヨーロッパ人がモルッカ諸島土人の傳說を傳へ載せる書は多いが、孰れも程度の差があつても多少の私見と作爲とが加へられてゐないものはない。乃ち、歷史的・地理的の推論、言語上の比較觀が混じてゐるのである。その程度は時代の下ると共に多くなり、それに對する一種の研究ともなり、批判ともなる。思ふに、說話を語る土人が時代と共に說話の內容を豐かにし形式を整へるため何物かを添加補足するが故に、記錄者がそれを分拆排列するに勞を要することもあらう。また前代の記錄者の說に更に後代の說が付加して次第に多くの意見が加重し、作爲が施されることも多いに違ひない。それ故に我等はヨーロッパ人の傳へる最も早い記載を尊重し、それよりなるべく素朴な說話の原形を把握しやうと欲するのである。その意味に於て、東印度航路發見後初めてモルッカ諸島を訪ねたポルトガル人の採收した說話を傳へるジョアン・デ・バロスの著書に負はねばならない。その記載する傳說の要旨は次の如くである。

モルッカ諸島は早く相異なる風習・言語・信仰の諸民族の住地として、その間に年の記錄がなく、度量衡がなかつたが、回教徒がポルトガル人の達する久しからぬ以前に丁香を求め來たつてより諸島の貴人間にマライ語が辛ふじて共通の語となり、ポルトガル人到達の頃には沿岸地は回教徒たる國王の領有に

歸してゐた。土人の傳說に從へば、彼等自身も古い外來者であつた。その後支那人・マライ人・ジャワ人のジャンクが來るやうになつたが、特に支那人は記憶に深いものがある。何故なら當時猶島名にバテ・シナ・デ・モーロといふが如きその消息が殘つてゐるからである。バテは土語で土地をシナは支那を意味して、支那人の國であり、モーロは土地本來の名として他のバテ・シナ・デ・ムアール等と區別するためである。而して支那人の來るまでは、土人は病氣のとき丁香の粉末を額と顏とに塗ること以外にはそれを使用するの智識を有たなかつた。この支那人の入國に由つて初めて丁香の智識が生じた。彼等は不足物を土人に與へて丁香を得るの消息に通じ、丁香を所有しやうとの慾望を抱いた。殊に中央に穴があつて千個毎に紐で貫す銅貨を以て交易した。それを土人がカシャと稱し、ポルトガル人はその千二百個を一クルザードに當ててゐる。蓋しこの銅貨はマラッカ以東の何處でも通用してゐるものである。支那人が引き續きこの諸島へ航海し來り、諸島の丁香・バンダの肉荳蔻を求めたが、この交易の評判を聞いてジャワ人も亦渡航するやうになり、遂に支那人の來ることが熄んだ。蓋し思ふに、支那の國王がその國民の出國を禁止した故であらう。かうして暫くの間はこの地方の通商と航海とはジャワ人の手中に屬し、その後マライ人も亦航通するに至つた。ポルトガル人東漸當初の頃にはこのジャワ人・マライ人の二民族が凡ての香料を交易運搬して大市場たるマラッカへもつて來たのである。この間にアラビヤ人がスマトラ及びマラッカを占領するところとなり、その住民を回教徒に化したので、そこに於て回教徒となつ

たジャワ人・マライ人が、モルッカ及びバンダに來り、沿岸の住民を回教徒に化した。[註1]

この記事は決して素朴な説話を傳へるものとはいへない。著者バロス自身の多くの推論が加へられ、傳聞採收者の觀察も混じてゐる。先づこの記載中に見える純粹な傳説と歴史上の事實とを區別するの必要がある。支那銅錢の流通はポルトガル人の目擊したことであるから、説話より除かねばならない。唯古代に於てそれが支那船と共に流入したといふ土人の記憶は、この實在の證據の伴ふ半ば説話的の分子の多いものである。支那人國外渡航の國禁を以て、モルッカ諸島への支那人の往來が中絶した原因となすのは、明かにバロス自身の極東に關する智識に由る推論解説である。また支那人に起源を發するといふ地名の識別にはモルッカ踏査のポルトガル人の觀察と見解とが多分に混じてゐるやうである。而してまた回教の侵入が諸島に文字を傳へ、言語の統一を助長したのは、土人の説話を整頓するに與つて力があつたことであらうが、併し同時にその純朴さを失はしめる一大原因をなすのである。それ故に我等はバロスの記載する説話が整ひ過ぎてゐるやうに思ふのは、幾分の修正が加へられてゐる故であらうと見做し度い。併しそれにも拘はらず、バロスの説へる説話の骨子は土人間の否曲少ない傳説であることが否まれない。またその後に採收して記載せられた諸書のそれに較べるならば、その孰れよりも傳説の原形を多く留めてゐることをも斷定し得るのである。いまこれを他書の記載に比較するの一例として、バロスの志を繼いでその二・三十年後アジャ志を著したディオゴ・デ・コウトの載せるモルッカ諸島の

消息の要旨を次に掲げやう。

この諸島の最も早い發見者にして住居者は支那人である。蓋しその理由は東洋に於ける船と航海術との發見者と認められるからである。或る人々はジャワ人がこの諸島を發見したといひ、或る人々はマルッコ人がそれに先んじたといふ。併し最も確かなことは支那人がその孰れにも先んじたことである。彼等は數百年前よりそのジャンクでこの海上を通過し、この諸島に着いたとき陸上の快適・花香・良果を見、そのときまで世界に知られることがない丁香を積んで去り、且つ諸島に殘留した者は數地方に定住するに至つた。その名殘の存續するのはバト・シナ・デ・モーロ、バト・シナ・デ・ムアールの地名に見られる。かうしてこの諸島が知られると、彼等は丁香を求めに來り、その芳香・快味及びその他の美點は渡來する何人よりも珍重せられた。それ故に支那人はこの交易を續け、そのジャンクでペルシャ灣・アラビヤへその國の陶磁器その他の物資と共に運び行き、そこよりペルシャ人・アラビヤ人の手によつて、それらの物資を愛好するギリシャ人・ローマ人の許へ送られた。ヨーロッパへはその他の香料と共にこのペルシャ人・アラビヤ人を介して達し、これらの人々はまたそれを支那人より得たから、その原産地を知られずして支那の地方より齎らされたものと思つた。丁香の智識はこのやうに古いから、プリニウスは既にその消息を知つてゐた。蓋しその書第十二卷第七章に、印度には胡椒に似たる稍長き粒果あり、カリオフィルンと稱ばれ、また他の者はガリオフィルンと稱すといふ。ペルシャ人はそれをカラフール

といふ。醫學者の認許を得てこれを語るとき、ラテン語のカリオフィルンは回教徒のカラフールの訛であらうと思はれる。何故ならその間に類似があるからである。而してこの香料がこのカラフールの名で回教徒の手によりヨーロッパへ渡つたから、その名を變じないのであらう。モルッカ人はこれにチャンケといひ、ブラマンの醫者は回教徒の名をも用ゐるが、別にラワンガともいふ。[註2]

コウトの記載にはその大部分に於て著者自身の見解と歴史的推論とが加はり、諸島の傳說に由來すると思はれる要素は甚だ乏しいのである。その見解にしても推論にしても、孰れも尤もな理由に基づいてゐて、首肯するに足るものであるが、併し我等の求める土人の說話はそこにはあるがままには現はれてゐない。その後モルッカ諸島に關する著書卽ち一六〇九年のアルヘンソラ、一七二四年のワレンタイン等の著書は孰れもコウトの亞流でなければ丁香の耕作及び貿易の記錄たるに過ぎない。

これを以て見ればモルッカ土人の說話の比較的素朴な要點を最も多く傳へるのはジョアン・デ・バロスの著書であることに異論がなからう。もとよりバロス自身がモルッカ諸島の見聞者でもなく旅行者でもないが、そのアジヤ諸國諸島の發見史を述べるに當つて、實驗者旅行者の報告に徵してそれを傳へてゐることは疑ひを容れない。バロス以前または同時代に東印度に在つた他のポルトガル人の著書中にもバロスの述べると同樣の消息が傳へられてゐること、乃ち例へばダルシヤ・ダ・オルタの「予の聞知せしところにては、支那人がその船を以てこの國へ來るまではモルッカ人は丁香樹を尊重せざりき。支那

人は丁香をその國及び印度・ペルシャ・アラビヤに運びたり。彼等（モルッカ住人）はこのことを記憶するところなり。」[註3]といひ、ドアルテ・バルボーザがモルッカに於ける中央に穴の開いた支那の銅錢の尊重せられたことを述べ[註4]、十六世紀初半のモルッカ諸島誌の著者ガブリエル・レベロも、諸島では回教渡來以前に文字がなかつた、それ故に土人は書くことが出來ないから虛構の話を語り、自ら何處より來たかを知らないといふことを傳へ、また土人がピペといひマライ人がカズルといふ唯一の貨幣が通用するが、それは金屬で造られて形圓く、中心に四角な穴があつて立派な形態をなし、片側に文字があつて他側にない、恐らく支那人の齎らした錢であらうが、舶載以來久しい年月を經た間に、ジャワへ多く流出したと記した[註5]。これらの著者はバロスと同樣の出處、卽ちモルッカの旅行者・見聞者の消息に基づくことが確かであるから、それだけバロスの記載は比較的に忠實であることを保證し信ぜしめるものと見て差し支へがない。ここに更めてバロスの記載を簡約すれば、乃ち次の事實に歸する。

當初の土人間に言語・度量の統一がなく、もとより年の記憶がないからその時代を指定し難いけれども、支那人が頻りに南海諸島の通商航海をなした間に、このモルッカ諸島に來り初めて丁香の香料としての價値を發見した。彼等はこれを盛に舶載したが、それと共に久しく諸島に殘留して定住する者も生ずるに至つた。當時の支那人通商の最大の徵證として圓形方穴の支那錢が多く殘り、ポルトガル人到達の當時も猶大いに通用したのである。また支那人定住の徵證としてはジロロ島にバト・シナ・デ・モー

ロといふ如き地名が殘されてゐる。その後ジャワ人がこの丁香貿易に目をつけて來り、次にまたマライ人も來た。この回教徒の到來はポルトガル人の到達の頃より甚だ早い時代ではない。回教徒の渡來を以て初めて諸島に共通の言語が生じ、國王の政治が生れた。

我等が最初の丁香發見船載者を知るの便りとしてこのモルッカ土人の傳說を重視するけれども、もとよりそのままにそれを信じてそれを肯定することは出來ない。何故なら傳說には多く不正確さがあり、曖昧さがあるのみならず、遠い時代に遡るに後つて誇張または縮少せられる傾向が多く、また前にも述べた如く後世の修飾の痕も察せられるからである。而かもモルッカ土人は明かに年代の觀念を失つてゐたから、この說話の包含する期間がどれ程の年數に當るかは最も知り難い點である。十六世紀に於て早くディオゴ・デ・コウトが、恰も土人の說話そのものを無條件に肯定する如き態度を示し、悠久な期間を數百年前と述べたのは、バロス等の土人の說くところに從つて暗默のうちに認定するところを明記したといふ以外に、また丁香のヨーロッパ船載を遡源考察して十數世紀を經過してゐなければならないと認めた理由以外に、自ら然く觀察せらるべきものがあつたのであらう。

我等は、今更めてこの土人の說話を問題にするに當つて、果してそれを肯定せらるべきか否かを丁香の船載・貿易に關係する東西の民族の記錄に由つて考へて見やう。それには說話の指示するところに從ひ支那人と丁香との問題が第一の疑問でなくてはならない。今我等がモルッカ傳說を中心として考察し

やうと欲することは第一に支那人の丁香を用ゐたのは果して何時代まで遡れるかであり、第二に支那人のモルッカ諸島渡航は何時代に初めて行はれたかであり、第三には西方人の丁香使用は何時代を以て初まるか、丁香原産地に對する智識・交通の順序は如何であるかであり、第四に西方人と支那人との孰れが早く丁香を知つたか、從つてその舶載者は何國人であつたかといふことである。

註1、Barros, Da Asia. Dec. III, Liv. V, Cap. V.

2、Couto, Da Asia. Dec. IV, Liv. VII, Cap. IX.

3、Orta, Coloquios dos simples e drogas da India. I, p. 364.

4、Barbosa, Livro. p. 372.

5、Rebello, Informação das cousas de Maluco. pp. 155, 156.

二、支那人の丁香の智識、漢代より南北朝時代まで

支那人と丁香の關係を遡源考察するにしても、支那人といふ名が頗る多數の民族を包容するものであるから、ここにはそれを支那に於てといふ制限せられた意味で先づそれを調べやう。而して第二の問題も亦これに附隨して論ぜられねばならない。丁香のみならず凡そ南海所産の香料にして漢以前に支那人に知られたもののないことは今日略々肯定せられてゐる。稻葉岩吉氏は支那民族の江南移動以前、または佛教渡來以前には支那人の用ゐる香料は支那土産品に限られ、南海の香料は未だ支那へ舶載せられな

かつたといふやうに論じ、その一根據として漢の貿易船が今の安南を越えたから、南洋諸島へかなり往來し諸國の物資を齎らしたが、漢書地理志に載せる委細な南方諸國との交通貿易の記錄に、明珠璧流離や、尸象銀銅の品目を錄して香料に及ばないことを擧げ、但し稀に國都長安へ外客に依つて貢納せられたこともあらうといふのである。[註1] 文學博士藤田豐八氏も亦漢書地理志の地名を考へて漢使の印度に及んだことを論じ、「當時漢人の購ひしものは明珠・璧流離・奇石・異物とあるのみにて、特に香料を擧げてないのは注意するに足ると想ふ。香料は三國時代以後、支那と西南海上諸國との商貨の主要なるものであるが、漢代ではさうでなかつたやうである。想ふに香料と佛敎とは大いに關係があつたので、佛敎移入前は香料は支那に於て廣く用ゐられなかつたのであらう。又た當時支那の船舶が遠く海外に航行したといふ樣子はない。從つて支那の商人が海外交易に從事した樣子も見えぬ。漢使到る所の國、皆な食を給して隨行し『蠻夷賈船轉送致之』といつて居るから漢使の乘つた船は外國の商船である。しかも譯長が應募者と海に入りて印度の南端に達したのは單に一度ではなく、屢々であつたやうである。又た武帝が絕域に使するものを募つたのは單に西域に遣つたのみでなく、西南海國にも送つたといふことは、ここに應募者といつて居るのでも知れると想ふ。[註2]」と說かれる。この兩學者の考へは香料支那渡來に關する限り至極尤ものやうである。併し、我等の留意すべきは南海の香料が絕對に支那へ渡らなかつたとは斷定せられてゐないことである。稻葉氏は晉葛洪の西京雜記中に數香料を載せるのを以て隨唐間の追記であ

るとなし、梁任昉の述異記中に「漢雍仲子進南海香物、拜倍陽尉、時謂之香尉」とあり、或は晉陳壽の三國魏志魏略に蘇合香以下十二種香を大秦の所産として擧げるのを以て三國時代前後に及び外客によつて稀に齎らされ、一部の限られた人士間の嗜好を充たしたと推定せられた。[註3] 我等も恐らく然る如くであらうと思ふものである。ここに說かうとする丁香も亦その範圍に加へらるべきであらう。淺學なる我等の知る限りに於ては、丁香に關する記事は後漢の應劭の漢官儀中に「桓帝時、待中迺存年老口臭、上出雞舌香與合之、雞舌頗小辛螫、不敢咀咽」[註4] と見えるところを以て最も古いものの一と考へやう。この一文のみに由つて、往時を推定するのは不可能であるが、唯少くとも後漢末には兎に角丁香が支那に於て知られてゐたことのみは推論し得られやう。稻葉氏は香乘の法和衆妙香中の漢建寧宮中香と題するうちに檀香・丁香皮・黃熟香・乳香・蘇合油の如き南海所産の香名とその量とを指示するものを後世の借題であると片付けられた。恐らくその說の如くであらうと思はれるが、それに拘らず丁香が後漢末より幾分遡つても猶支那へ舶載せられたであらうといふことは想像するに足りやう。

三國時代には他の南海所産の香料を差し措いて、特に丁香の産地を略々支那に於て想像せられるやうな頗る重視すべき記錄がある。それは吳の康泰の上表した扶南土俗傳中の「諸薄之東、有馬五洲、出雞舌香樹、本多華少實」[註5] である。唐李延壽の撰する南史南海傳中に、「吳孫權時、遣宣化從事朱應中郎康泰通焉、其所經過及傳聞則百數十國、因立記傳」と見える如く、康泰が吳の孫權の命を承けて南海諸國に使

し、歸國の後にその見聞を書き綴つて上表した記錄の一節であつて、そこには丁香卽ち雞舌香の產地として馬五洲の名が擧げられるのである。馬五洲が康泰の踏破した島ではないことが明かであるから、この漠然たる傳聞は果して孰れの國を指してゐるかを知るのは、支那人の丁香に關する智識を論ずるに當つては必須のことである。然るに前記の扶南土俗傳中の諸薄國及び五馬洲に就ては、唐杜祐の通典（卷一八八）中に同じく土俗傳の「又傳、扶南東界卽漲海、海中有大洲、洲上有諸薄國、國東有馬五洲、又東行漲海千餘里、有燃火洲」といふ一節が引かれてゐるのは、その位置を說明するに資すべきものである。[註6]

この諸薄國・馬五洲の位置を推定した人に先づフランスのポール・ペリオー氏がある。[註6] 同氏の諸薄ジャワ說の要點は次の如くである。「この諸薄國は康泰の遣使に直に遡つて觸れる（外國傳以外の）他の書のうちにも傳へられてゐるが、それは扶南の東方なる漲海中にある。この海は海南(島)よりマラッカ海峽に及ぶ現時の支那海である。然るにジャワは別にカンボヂャといふ扶南の東方に存せずして、その南東に在る。それに就ては支那人の（方向）表示がときに嚴密にいつて正確さを缺くことがあるのを考へられやう。その故は蓋しジャワの外緣ではボルネオ以外に考へ付かないが、そのボルネオは決してカンボヂャの東にあるのではない。その上、隋代に兩度現れた消息でも亦、扶南の東方なる漲海中に杜薄國ありといはれる。このときも、同樣に（杜薄國に）ジャワを想像し得ることが知られやう。若し諸薄

がジャワであるならば、諸薄の東に在る五馬洲は恐らくバリー（島）に求められねばならない。この場合には疑もなく馬五は馬立または馬里と正されねばならない。」同氏は更に唐道宣の法苑珠林を引いてその「五馬洲出雞舌香」が太平御覽に出でるものであるが、そこに於て馬五が五馬となつてゐるのは不自然であるといひ、更に馬五のバリー説を堅めるために、新唐書の馬禮、諸蕃志の麻篤・琶離等を引き合ひに出してゐる。尙諸薄・杜薄のジャワに當たることに就ても後世の闍婆等と關聯して說くのである。

然るにその後藤田博士は、「葉調、斯調、私訶條につきて」のうちで、諸薄に就ては「梁書〔康泰の所傳に依れる〕の『扶南東海、卽大漲海、海中有ノ洲、洲上有ニ諸薄國一』といへる諸薄國の方位と、その名稱とから視ると、第九世紀の亞刺伯人 Ibn Khordādbeh, Sulaymān などの Djawaga (Zābag) に相違あるまいと想ふ。これは今の Java から Sumatra にかけての國名であつてその本據は今の Java に在つたやうである」と說き、五馬洲に就ては、太平御覽の引用文「諸薄之東、有五馬州、出ニ雞舌香樹一」の雞舌香の產地たるを以てモルッカ諸島を指すやうに考へ、丁香の諸島の土名 gaumedi を聯想し、馬五州が倒まに五馬とあるべきであり、從つてそれはゴメヂーの對音であらうとせられる。且つ馬五が五馬と逆に記された太平御覽（卷三六）の吳時外國傳に據る一節、前揭の法苑珠林の一節、宗法雲の翻譯名義集（卷六）を引證せられた。

以上の東西の兩學者の說を對照比較すれば、先づ諸薄國を考定して一はジャワ島と見做し、他はそれよりも廣い範圍のジャワ國であるとなす推論の方法に於て兩者は全く相違した途をとつてゐる、且つ孰れも不安定な假設を基としてゐるから、それを充分に納得し難いが、結論に於て兩者の說が相對立してゐるといふわけではない。諸薄國のジャワ國說が、兩學者の相異なる推定の經過に徵しても、略々承服せらるべきものと見做して差し支へがないやうに思はれる。[註8] 併し、これをジャワ一島に限ると、ジャワを中心とする大ジャワに擴げて見るとは、その東方にありといふ馬五洲の位置を考へるに頗る大きな影響を與へるものといはねばならない。ポール・ペリオー氏が馬五を馬立または馬里にまで變じてジャワ直東のバリー島に比定したのは諸薄ジャワ島說の結果でもあり、音韻上の並に後世の諸史に見える文字への類推にも因るが、そこには雞舌香卽ち丁香を產しないといふ致命的の事實が閑却せられてゐる。藤田博士がその點を强調してそれをモルッカ諸島に充てたのはペリオー氏のそれよりも妥當である。また諸薄之東といふ語をジャワの東隣と解せずして、莫然と東方にありと見做し、且つ諸薄を同博士の如くジャワ附近を含めた大ジャワとして認めれば、モルッカ諸島を含めるジャワ以東の諸島を馬五洲に該當せしめて差し支へがないのであらう。唯同博士が馬五洲を五馬洲の誤りと見做し、丁香のモルッカ土名ゴメヂーの對音であるとせられるのに贊意を表することを幾分躊躇せざるを得ない。乃ち諸島代表產物たる丁香の土名を以て諸島名とすることは必ずしも不穩當ではなからうが、併し、それには丁香の土名の

存在が何時代まで遡れるか、また果してゴメヂーが三世紀以前に於ても土語として用ゐられたか否か、この土語に並立或ひは優越する同意味の他語が諸島に用ゐられてゐたかどうかをも考慮せられねばならない。我等にはそれに就て多くを語ることも、その間の區別を明瞭になすことも困難であるが、後に丁香の諸名義を少しく說きいさゝかそれに對する疑點を述べるところがあらう。

以上の所說を要するに我等の考へるところは、若し吳の康泰の傳へる馬五洲がモルッカ諸島そのものであると斷定し難いとしても、少くともそれを含む南洋の一地方を表示するものと見做すのである。而して我等のより多く重視し度いと欲する點は康泰が何處に於てこの馬五洲とその雞舌香樹の消息を聞知したか、また何國人より乃ち支那人かマライ人かそれとも他の國人からそれを傳へたかといふことである。併し、それに就ては康泰の著書の現存する斷片のみを以てしては到底確かめ難いのである。

翻つて思ふに當代支那本土に於ける丁香の智識は、康泰の報告に因つてどれ程進められたであらうか。それに就て參考すべきは、康泰と同時代の吳の萬震の南州異物志に「雞舌香出杜薄州云、是草花可含香口。」[註3]とある一節である。萬震の記事が康泰に出づるとし、また馬五洲を脫して雞舌香を直接に杜薄州の產物とし、諸薄國を杜薄州と誤つたとしても、雞舌香の產地が誤聞のままで吳代の他書に寫されたことと、諸薄を杜薄に一字を置き換へられたこととに留意が拂はれねばならない。これを以て見れば、南州異物志または吳時外國傳を介して丁香の產地とその生育狀態とに關する莫然たる智識が當代支那の

一部人士の間に弘まつたことが否まれない。併し、これを以て急やかに必ずしも丁香の渡來が多くなり使用の範圍が增大したことを意味するものといへないかも知れない。

晉代に及んで葛洪の枹朴子中に雞舌香の藥用法が記されてゐる。[註10] また後魏の賈思勰の齊民要術（卷五）には「雞舌香、俗人以其似丁字、故爲丁子香也」といふ構造名儀の詮議が現れ、劉宋の電斅の炮炙論は、「凡使有雄雌、雄顆小、雌顆大、似橡棗核、方中多使雌、力大故膏前中用雄、若使雄須去丁蓋子、蓋子發人背癰、」[註11] と記して二種の果實の形體性質を論じてその效力の優劣を說いた。殊に梁の陶弘景の本草經集注[註12]には詳しく丁香の藥效を記載するものを見るのである。これを以て考へれば南北朝時代には前代よりも遙かに多く丁香の知識が普及したやうであるから、その需用が增加し從つて舶載渡來の量も亦前代に超えるものであつたと推定して差し支へがなからう。蓋しその然る所以は一に支那人の江南移動に係り、二には南海貿易の盛んになつたことに存しやう。殊に當代南海貿易の發展は最も大きな關係を有するのである。南史南海傳中に「晉代通中國者蓋鮮焉、故不載史官、及宋齊至梁、其奉正朔修貢職、航海往々至矣」と南海貿易の大勢を說くが、別に委細な貿易關係も亦諸史に傳へられてゐる。その實狀はまた梁蕭子顯の南齊書南蠻傳贊が「至於南夷雜種、分嶼建國、四方珍怪、莫此爲先、藏山隱海、瓌寶溢目、商舶遠屆、委輸南州、故廣富實、初積王府」といひ、唐姚思廉の撰する梁書王僧孺傳に、「尋出爲南海大守、郡常有高凉生口及海舶、每歲數至外國賈人以通貨易、舊時州郡、以半價就市、又買而卽賣、其

利數倍」と見える如き文をその例として、それを以てこれを推察するに足りやう。唐魏徵の隨書（卷三）には隨使常駿が赤土國に赴いたことが載せられ、その四隣の諸國中に東婆羅刺國の名も見えるが、桑田六郎氏はその「三佛齊考」[註13]に於て、赤土をマライ半島南部の國とし、婆羅利を唐代の婆利卽ちバリー島に充てられてゐる。而して「使赤土致羅罽」の羅罽が太平寰宇記・太平御覽の羅刹國として婆羅刺が婆羅刺刹の誤りであつて、唐書環王國傳に「婆利東卽羅刹也」といつてもバリー島の東へまで赴いたのではなく莫然たる記述であると論ぜられる。この桑田氏の說は現今までに現れた赤土國考定に關する研究中の最も妥當にして且つ進步したものであることを認むべきであらう。而して假りに婆羅利がバリー島に該當するとすれば、隨使がマライ半島よりマライ諸島のうちの孰れかの島に達したかも知れぬとの疑問も起り、少くとも諸島の消息を簡略ながら收得したといふことが出來やう。而して當代にはバリー以東が以西に比して未開の度が甚だしかつたことは肯定せられるとして、また羅刹國がバリー以東を正確に指すものでないとしても、隨代の支那人がモルッカ方面の諸島に全然無智識であつたといふことを示すものとは思はれない。このことは隨代より二世紀を遡る吳使の傳へた五馬洲の消息と併せて、また唐初貞觀中に婆利國及び羅利國の使者が支那に來つて方物を獻じ[註14]たといふことと關聯して、我等に頗る興味を抱かせるのである。尙それに關して留意すべきことは梁書の婆利國、隨書の婆利國に關し、前引の桑田氏の論究はこれを印度東部に置き、從つて隨書に「自交趾浮海過赤土丹々乃至其國、國界東西四

月行南北四十五日行」と婆利の位置を説くものに、赤土の次に闍婆の缺けてゐる理由に基づき丹丹をガンジス下流の國土に充ててゐることである。我等はそれに就ては桑田田の説に充分に服することが出來ない。殊に隨書の闍婆を脱することを理由とするのは尚一考を要するのであらうと思ふ。但し、段成式の酉陽雜俎中に見える龍腦を産する婆利國を婆律國の誤りであるとなすのは桑田氏の文にも論ぜられ、我等も唐宋時代凡ての本草書の唯婆律國のみを産地とすることに據つてそれを推定するのである。

さて一般香料普及には當代に於ける佛敎の傳播が直接の影響を與へたことは、稻葉氏[註15]の説かれる如く疑ひない現象であるが、丁香の場合に於ては他の諸香料のそれと異なり、寧ろ佛敎に負ふところが頗る間接的であり輕微であつたと推測したい。蓋し後に説く如く丁香の産地の印度と距ること遠きと、また丁香傳播の大勢と、その用途が主として藥味・醫藥であつて、唐陳藏器の本草拾遺に「入香不用」と見へる如く餘り薫香の用に充てられなかつたこととにその理由が認められやう。

註1、稻葉岩吉氏、支那香料ノ研究、東亞經濟研究一〇ノ四、三七—三八頁。

2、藤田豐八氏、前漢に於ける西南海上交通の記錄（東西交涉史の研究南海篇、一三四—一三五頁）

3、稻葉氏、前引書三八—三九頁。

4、遍智院成賢、香要抄所引。この文中の雞舌香は沈香の一種ではなくして、丁香の異名であるのは容易に首肯せられる。

5、宋李子昉等撰、太平御覽卷七八七所引。

6、藤田博士が「葉調・新調・私訶條につきて」中に姚思廉の梁書（卷四五）扶南傳の略々これと同文を載せるのは扶南傳より採、

たことを說かれ、更に太平御覽卷七八六にある同じい康泰の吳時外國傳より引用の省略文をも併せて載せられてゐる。

7、Pelliot, Deux Itinéraire de Chine en Inde à la fin de VIII siècle. (B. E. F. E.—O. IV, p. 269.)

8、尙それに就て桑田六郎氏、三佛齊考（臺北帝國大學文政學部史學科研究年報第三輯）二二、二三、六五、六六頁をも參照せらるべきである。

9、香要抄本所引。

10、同代陶潛の續搜神記中に見える雞舌香は丁香ではなくして沈香の一種のやうである。

11、宋唐愼微、重修政和經史證類備用本草卷十二所引。

12、前引證類本草卷二に見える。

13、桑田氏前引書一三頁以下。

14、唐書及び册府元龜、桑田氏前引書二三頁所引。

15、前引書。

三、唐宋時代

唐代は南海及び印度方面との貿易の盛況に於て前代を遙かに超え、支那に於けるその最も繁盛な時代の一であつたのは既に周知のことであり、それを研究した學者も數指に餘るのである。[註1] それ故にここには唐代南海貿易の狀況を說くことを罷める。併し、いま當代の丁香及びその產地に就て詳論するの前提として、前に述べた唐書及び册府元龜に貞觀中の婆利國・羅刹國といふ如きジャワ以東のマライ諸島よ

りの貢使の渡來が傳へられ、また唐會要・唐書・太平寰宇記に婆利國の位置を、拘蔞密の東南十日の航程といひ、金利毗逝國より南に去ること三千里と稱する[註2]如く、バリー島の位置が兎に角莫然とではあるが載せられてゐるのを以て見れば支那とそれらの南海諸國との交通が皆無ではなかつたことを肯定しやう。

さて丁香の輸入に就て考へれば、南海貿易の盛大になるに從つて前代を凌駕するに至つたことは容易に推測し得られる。唐代本草書のこれを記載するものを列擧すれば、唐初顯慶に出でた李勣・蘇敬の新修本草[註3]を初めとして、著者不明聖惠方、孫思邈の千金方[註4]、甄立言の藥性論[註5]、陳藏器の本草拾遺[註6]、李珣の海藥本草[註7]がある。これらの書の記載は後世の書に引用せられて斷片的ながら我等の目に觸れることの出來るもののみである。凡そ唐代の本草書は殆んど悉く亡失して後世に傳はらないから、その他の多くの書も皆丁香を說くところがあつただらうと推測して無理があるまい。いま我等の觸目する唐代本草書の丁香に關する記述はその數頗る少ないが、兎に角それに依つて考へるに、その內容に於ては、前代卽ち南北朝時代の諸書に見えるものとは頗るその性質を異にするのである。乃ち藥性論・本草拾遺がその藥効を說くのを、もとより異とすべきではないが、海藥本草のその產地を傳へ、本草拾遺・海藥本草が丁香樹の生育狀況を述べ收獲期を載せるのは、植物史上にも貿易史上にも一大貢獻をなすものである。

產地として「生東海及崑崙國[註8]」と傳へて、唯莫然と南海諸國の所產たるを記すのは、當代の識者が丁

香原産地の正しい消息に通じなかつたことを示すやうである。且つ前代に於てもこの程度のことはもとより知られてゐたであらうと思はれる。然るに拘らず特に唐代本草書にこの莫然としてはゐても兎に角その産地を記載するのは、丁香樹そのものの説明を伴ふとき頗る重要な意義を帶びるのである。丁香樹の狀態を傳へるのは本草拾遺の「雞舌香同種丁香、花實叢生」であり、開花及び收獲の時季に就ては海藥本草に「二月三月開花、紫白色、至七月初成實、小丁香、大如巴豆、成母丁香」と說かれるものがある。これを現代の書の特にモルッカ諸島丁香樹の狀形を說明するところに照合して見やう。例へばリドレイ氏の香料研究に從へば、丁香樹は二・三の主枝より多枝を分ち、小枝は高上せず、餘り擴がらずして甚だ細い、樹皮は灰色を帶びる、葉の兩端は尖り、色暗綠にして質薄く皮の如くに硬い、葉身の長さ三乃至五インチ、廣さ一乃至一半インチ、對生する、花は年の後半に著き、枝端に生ずる、三箇の角の花梗あつて、各花梗の尖端に短く細い花を頂くのである。[註9] 而して丁香の收獲期は現代と中世とに於て幾分異なるやうである。十六世紀前半ヨーロッパ人のモルッカ發見直後にモルッカ誌を著したレベロに從へば、その當時では二月に準備せられ八月に收獲せられたやうである。[註10] また十六世紀末の狀況を說いたアルヘンソラのモルッカ誌に從へば、丁香の果實は二月より九月に亙つて成熟したやうである。[註11] この丁香樹に關する觀察を前記の唐代本草書の乏しい記載に對照するならば、收獲期をば傳へてゐないけれども、その要點に於て本草家の記載が當を得てゐることが知られるであらう。[註12] この事實は何を意味するの

であらうか。當代の南海交通が頻繁であり、南海諸國船の丁香を支那に積んで來るものが多く、それらの南海人より丁香樹の消息が支那に傳へられたのは否定し難いけれども、このやうに誤りの少ない樹木の觀察記が傳へられるのは、寧ろ支那人のうちに親しくモルッカ諸島に渡り、產地を目堵しその實見するところを本國に齎らした者も稀にはあつた故であると考へられないであらうか。若しこの想像にして許容せらるべきものとすれば、それらの實見者たる支那人は敎養深い人々ではなかつたと考へやう。更に狹義に解すれば商人であつたであらう。それ故にその傳へるところが正確であるとは必ずしも保證し難いのみならず、その上本草家の聞知に達するまでには幾分の歪曲が加はつたと見做されやう。更に若し以上の推測が是認せられるならば、何故に丁香の產地が、モルッカ諸島を示すべき何等かの名を以てせずして、交廣南蕃或ひは東海及び崑崙國といふ曖昧な表示を以て傳へられるかとの疑問が起されねばならない。我等はそれを充分に解くことが出來ないけれども、丁香實見の支那人の南海諸國に對する無頓着に出づるものとし、或ひは本草家の耳に達する前にその消息が消失し、または書上の記載が本草家の見解に出づるものとそれを考へ、または當時モルッカ諸島の住民が頗る未開にして彼等の間に丁香を產する諸島を總稱すべき名がなかつた故であらうとも思ふのである。而して、その疑問に對する答へとして後者により多くの重點が置かれよう。前にも述べた如く丁香樹に關する記載が唐初高宗顯慶の新修本草では誤りが少なくないやうである。これは支那人の丁香實見の消息が唐代中頃に至つて始めて傳へられ

たものであることを暗示するやうに思はれる。乃ち唐以前の六朝期隋代に於ては、支那人のモルッカ渡航が行はれなかつたか、若し行はれても丁香の觀察が全く支那へ齎らされず、唐初に於ても同樣であつたことと、その後唐の中葉に至つて初めて實見の消息が傳はつたのではなからうかとの想像が我等に許されるのである。

然るに丁香と原產地を略々同じくする肉荳蔻に就て[註13]見るに、證類本草並に本草綱目に據れば、唐代の諸本草書は殆んどそれを載せてゐない。乃ち草荳蔻・白荳蔻に關する記事は多いけれども、それを本草家は明かに識別して傳へるのである。唯二つの例外は開元中の陳藏器の本草拾遺と李珣の海藥本草とであるが、前者には明かに肉荳蔻の藥效を載せてゐる。併しその終りに「生胡國、胡名迦拘勒」としてゐるから、それは恐らくアラビア人またはペルシャ人等西方人の將來にかかり、支那人の舶載するところではなかつたのであらう。何故なら迦拘勒はアラビヤ語ペルシャ語の Kākula であり、サンスクリットの Kakkola であつて、眞には白荳蔻を意味するから、その將來者より支那人が取り違へてその名を傳へたことが想像せられるのは、ゲリニ氏[註14]・藤田博士[註15]・桑田氏[註16]の論ぜられた通りに違ひない。從つてその生胡國は西方人の仲介貿易に由ることを意味してゐると見て差し支へがない。その後間もなく現れた海藥本草に「生崑崙及大秦國」[註17]と傳へるのは、これ亦略々西方人所傳を肯定するのである。肉荳蔻に關する記錄の缺除と舶載經路の間接とは、唐代支那人のモルッカ諸島渡海を推定するに重大な障害となるの

である。若し支那人が肉荳蔻を尊重すること遙かに丁香に劣り、または時代の上よりいつて遙かに後れたといふことが前提とせられねば、それを說明することが出來ない。我等はそれに關する他の確證を有せぬけれども、現存の記錄のみより見て恐らくさうであらうと考へたいのであるが、兎に角これを以て支那人のモルッカ渡航を斷定し難い理由と見做さう。ブレットシュナイダー氏が八世紀以前には肉荳蔻が支那人に知られなかつたと說くのは他の證據を以ていふところであらうが、[註18] その我等の見解と符合することを興味深く思ふ。

尙唐代の丁香渡來に就て一言すべきは、ヒルッ氏が唐段成式の酉陽雜俎卷十八を引き、また劉恂の嶺表錄異卷中を參照すべしとして、そこに丁香が波斯棗と記載せられ、ペルシャ人がそれを窟莽と稱すること、並にそれと關聯し唐書卷二二一の鶻奔と見える名を揭げることである。[註19] これはヒルッ氏が明かには說かないけれども、唐代に丁香がペルシャ人に由つて仲介船載せられたといふことを暗示するのである。我等はいまヒルッ氏の引用する諸書を更めて檢するに、同氏の暗示と頗る異るものを見出すのである。乃ち酉陽雜俎の當該文は「波斯棗出波斯國、波斯國呼爲窟莽、樹長三四丈、圍五六尺、葉似土藤不凋、二月生花、狀如蕉花、有兩甲、漸漸開、鑄中有十餘房、子長二寸黃白色、有二核熟則子黑、狀類乾棗味甘如餳、可食」であり、嶺表錄異の當該文は「波斯棗廣州郭內見其樹、樹身無間、枝直聳三四十尺、及樹頂四向共十餘枝葉如海椶、廣州所種者或三五年一番結子亦似北中靑棗但小耳、自靑及黃葉已盡朶朶

著子每朶約三二十顆、恂曾于番酋家食、本國將來者色類砂糖、皮肉軟爛餌之乃火爍水蒸之味也、其核與北中棗殊異兩頭不尖雙卷而圓如小塊紫礦、恂亦收而種之久無萌芽疑是蒸熟也、魏文帝詔群臣曰、南方龍・眼荔枝寧比西國葡萄石蜜乎、酢且不如中國丸棗味莫言安邑御棗也」である。この波斯棗の樹木の說明を、前引した本草書の丁香樹の記載または現代の丁香樹の研究に精細に對照するならば、兩者の間に頗る大なる相違のあることに心付くであらう。少くとも波斯棗一名窟莽が丁香樹と異なる樹種であるのは明瞭である。それ故にヒルッ氏の暗示とは反對に、我等は唐代の支那へは大食人・波斯人の仲介を經て輸入せられた丁香が少なかつたか、または皆無であつたことを信じやうと欲するのである。

唐代に續く五代・宋代には對外貿易がいよいよ發達し、南支那諸港に於ける內外船往來の頻繁を極めたことは多くの學者の研究があるから、ここには特にそれを述べない。この間に於て、唐宋元三代を通じ、殊に宋代に於てアラビヤ人の支那交通が盛んであつたときには、同時に支那船も亦遠く印度を超えてアラビヤ沿岸に至り、南海諸國に通商したことは、これ亦明かな事實として認められてゐる。宋代に於ける海外交通の範圍を示すものとして擧げられ粵海關志（卷二）所引宋王溥の宋會要の列擧する國名を支那船の渡航地として理解することが可能であらう。また同樣に趙汝适の諸蕃志の內容する諸國名もその大部分を支那人の往訪した國として認めて差し支へがなからう。それらの書の傳へる國名のうちに、勃泥・麻逸卽ちボルネオ及びフィリッピン群島の一部の名が見えて當代支那人の關心が少なからずその

方面に向けられてゐることを知るのは殊に留意に價するのである。元脱脱の宋史卷四八五の渤泥に關する詳細な記述は殊にこの見地より考へて興味が多い。これを換言すれば宋代殊に南宋の時代にはジャワ以東の諸島は支那人にとつて決して未知の國でも、案内不充分な地方でもなつたのである。少くとも唐代のその方面に對する智識よりも遙かに詳かな消息に通じてゐたのである。

支那の香料舶載並に使用は唐以後に於て全盛を極め、香料は南海諸國より輸入する物資中の主位を占めて最も重要視せられた。桑原博士は「宋史卷百八十五に、『宋之經費。茶・鹽・礬之外。惟香之爲レ利博。故以レ官爲レ市。』といへり。かく政府が香料の專賣にて多額の利益を得しは、畢竟その需要盛なりし結果に外ならず。唐宋時代を通じて、支那に於ける香料の需要は驚くべき活況を呈せり。清異錄卷下の薰燎門を一瞥するも、唐代薰香の流行盛なりし一端を察すべく、又南宋の陸游の老學庵筆記(「學津討原」本)に、卷一に、京師(=開封)承平時。宗室・戚里。歲時入二禁中一。婦女上二牘車一。皆用二二小鬟一。持二香毬一在レ旁。而袖中自持二兩小香毬一。車馳過香烟如レ雲。數里不レ絕。塵土皆香。といへば、當時權貴の間に、諸香の需要多大なりし大概を知るべし。」[註20]といつてその事實を說明し、稻葉氏が北宋末に女眞人が國都を陷れてその財寶を鹵掠したときのことを傳へた石林燕語の一文を載せて說くところは次の如くである。「宋内香藥庫。在諺門外、凡二十八庫、眞宗御賜詩一首爲庫額曰、每歲沈檀來遠裔、累朝珠玉實皇居、今辰御庫初開處、克勒尤宜史筆書、トアルカラ、鹵掠サレタ香料ハ、内香藥庫ニ屬シ、莫大ノ

數量ニ上ツタノデアラウト思フ。內香藥庫ノ數二十有八箇ハ、イカニ支那トハイヒナガラ、帝王ノ豪侈生活ハ想像ニアマリアリ、同時、一般ノ香料趣味ハ推察サレル。」[註21]また藤田博士は南宋開嬉二年の序ある趙彥衞の雲麓漫鈔に見える泉州一港に於ける貿易狀況の次の說明を引用する。「福建市舶司常到諸國船舶、大食・嘉令・麻辣・新條・甘秤・三佛齊國、則有ニ眞珠象牙・犀角腦子・乳香・沉香・煎香・珊瑚・琉璃・瑪瑙・玳瑁・龜筒・梔子香・薔薇水・龍涎等ヽ、眞臘亦名ニ眞理富ヽ、三泊・緣洋・登流眉・西棚・羅斛・蒲甘國、則有ニ金顏香等ヽ、渤泥國則有ニ腦版ヽ、闍婆國多ニ藥物ヽ、占城・目麗・木力千・賓達儂・胡麻巴洞・新洲國、則有ニ夾煎ヽ、佛囉安・朋豐・達囉啼・達磨國・則有ニ木香ヽ、波斯蘭・摩逸・三嶼・蒲哩喚・白蒲邇國、則有ニ吉貝布貝紗ヽ、高麗國則有ニ人參・銀・銅・水銀・綾布等物ヽ、大抵諸國產ノ香略同、以上船舶候ニ南風ヽ則回、惟高麗北風方回、凡乳香有ニ揀香、・餅香分三等・榻香・墨榻水濕・黑榻纏末ヽ、如上諸國、多不ノ見ニ史傳ヽ、惟市舶司有ノ之」[註22]。これ等の文は一・二の例に過ぎないが、それを以て香料渡來の實況を推測するに足りやう。

丁香は勿論南海渡來の主要な香料の一であつた。その徵證はもとより一にして足りないが、ここにはその最も適切な一例として、藤田博士の引く宋會要中の南宋高宗の紹興十七年詔して四分の高率輸入稅を科したことを載せる一文「紹興十七年十一月四日、詔三路市舶司、今後蕃商販ニ到龍腦沈香丁香白荳蔻四色ヽ、并依ノ舊押ニ解一分ヽ、餘數依ニ舊法ニ施行○先ノ是紹興十四年一時措置、抽ニ解四分ヽ、以四市舶司言ニ蕃

商陳ニ訴抽解太重ニ、故降ニ是旨ニ」を轉載しやう。丁香の用途・效力を記載する書も、我等の知る限りでは僞蜀の韓保昇の蜀本草、宋初開寶の詳定本草、日華子本草、掌禹錫の嘉祐補註本草、蘇頌の本草圖經、蘇軾・沈括の蘇沈良方、唐愼微の證類本草及び證類本草に引く簡要濟衆、沈存中筆談並びに寇宗奭の本草衍義等の多きに上り、唐代のそれよりも遙かに多く用ゐられたことが推測せられる。而してまた當代海外智識の集積とも見做される周去非の嶺外代答及び趙汝适の諸蕃志中に諸國土產中の丁香を指摘せられることの多いのをも特に留意せられねばならない。諸蕃志の如きは闍婆國・蘇吉丹・南毗國・大食國・雍蠻國の項に丁香を記載してゐるのは、宋代に於て丁香が諸國人の仲介貿易を以て支那に舶載せられるのも少くなかつたことを示すのではなからうか。闍婆國・蘇吉丹は丁香取引の中心市場を有する國であり且つジャワ人の舶載多いことを意味し、それ以下のマラバル・アラビヤ・オーマンの地名はアラビヤ人にして支那へ渡來する商人を介して輸入せられたことを意味するものであらう。宋會要歷代朝貢天嬉二年の項に山堂考索より引くところとして三佛齊の貢した南海所產の諸香料を擧げてあるが、そのうちに丁香三十斤、肉荳蔻二千六百七十斤を記され、同じく紹興二十六年の入貢諸香中にも前者と同量の丁香・肉荳蔻があり、淳熙五年の貢品中には丁香を擧げずして肉荳蔻八十斤と見える。[註23] 桑田氏の說かれる如く、嶺外代答及び諸蕃志に從つて、三佛齊が交通の要衝を占め、西方並に南海諸國の物產がここに集まり、その政治的勢力はスマトラ全島・ジャワ西部・マライ半島南部に及んだから、その支那舶載品中

に丁香等の見えるのはもとより怪しむべきではないが、而かも三佛齊は九世紀後半には回教徒の國となつてゐるから、これを仲介としたアラビヤ人の支那舶載の一大實例と見ることが出來やう。併し嶺外代答では唯闍婆國の土産中に檀香・丁香・肉荳蔻を載せるのみであるから、ジャワが中心市場であつたといふ以外にもジャワを中心とする現時のオランダ領諸島を總稱するものかとも考へられ、從つて丁香原産地たるモルッカ諸島を暗にそれに含めてゐると解せられぬこともない。

然るに唐以後の本草書地理書に由つてこれを見れば、支那人の丁香産地に對する智識のいよいよ増大したことが知られるであらう。我等は前に唐代の本草書を檢して唐代に於ける支那人のモルッカ渡航を想像したが、宋代に至つてそれは更に發展進歩したから殆んど確定的に事實を肯定するに足るの消息が見られる。蘇頌の本草圖經には、雞舌香「枝葉及皮並似栗、花如梅花、子似棗核、此雌者也、雄者着花不實、採花釀之、以成香」といはれ、また「或有謂、雞舌香與丁香同種、花實叢生、其中心最大者爲雞舌、」と見え、或ひは丁香「桂高丈餘、葉似櫟、凌冬不凋、花圓細黃色、其子出枝蘂上如釘子、長三四分、紫色、其中有麤大如山茱萸、謂之母丁香、二月八月採子及根」[註24]と傳へられる。證類本草も亦「生交廣南蕃二月八月採」と收穫の時期を記してゐる。これらの書の說には唐代の記錄を踏襲した形跡も見えるが、當代に至つて知られ確かめられた事實も數多く追加せられてゐる。これを前に述べた現代學者の丁香樹の觀察に對照するときは、事實の傳聞が確かになつたことを理解せられる。また證類本草には

廣州丁香と稱してその樹容を圖畫に表はされてゐるのは、同書に本草圖經の「又謂、果有此香、海商亦見之」を引用して產地に赴いた商人の實見するところがあつたことを肯定してゐるところより見て、それをモルッカより舶載し來つた丁香樹を實見して描いたものと解することが出來やう。

尙肉荳蔻に就て檢しても略々それを確かめることが出來る。本草書としては本草衍義にこれを草荳蔻と區別すべきこととその形狀及び藥效とを載せ、證類本草は獨自の見解を記さずして他書より轉載してゐるに過ぎない。併し當代南海方面の智識の集積とでもいふべき趙汝适の諸蕃志は、肉荳蔻が「出黃麻駐・牛崙深蕃」と明記する。この二地名に就ては、同書蘇吉丹の項に、蘇吉丹の附近にある諸島のうちの二島であるやうに說かれてゐるから、ヒルッ氏の推定する如く、[註15] モルッカ諸島またはアムボイナ島の如きを指すものと見做すのは決して無理ではない。唯それに比定せらるべき名稱を今日猶その地方に發見し難いから、或ひは當時の土人の所傳に出づるものであるかも知れない。また同じい諸蕃志には肉荳蔻樹に就ても、「樹中國之柏高至十丈、枝幹條枚蕃衍敷、廣蔽四五十人、春季花開、採而曬乾、今荳蔻花是也、其實如榧子、去其殼、取其肉、以灰藏之、可以耐久、按草本其性溫」と載せらる。この樹容及び果實の說明に至つては、殆んど眞實に近いことが現代の學者の觀察に對照して確かめられるから、支那人が產地に赴いて實見したところを傳へるものと見做して殆んど無理がない。[註26]

同一の故鄕を有する二植物の一なる丁香の實見記を述べて肉荳蔻を餘り詳しくは傳へない本草書と、

それと反對に肉荳蔻の眞實を傳へて丁香のそれを載せない諸蕃志との相違は、思ふに共にモルッカ歸來の支那人に負ふところがあつたに拘らず、その將來または傳播の系統を異にするが故に生じたのであらう。

尙次手ながらここに一言すべきは、嶺外代答にある「闍婆之東東大洋海也、水勢漸低女人國在焉、愈東則尾閭之所泄、非復人生」といふ一文に就てである。石澤發身氏の「闍婆及爪哇異同考」[註27]にはこれに就て、「闍婆之東東大洋海也云々の記事に於て、其東大洋海とは馬來半島の東方卽ち現今支那海の一部及暹羅灣等を總稱する者と爲さざる可らず、然るに此海上は九世紀の頃より亞剌比亞人との交通貿易頻繁にして、支那人に最も能く知られたる航海通路になり、決して尾閭之所泄非復人生などゝ稱せらるべき洋海にあらず、之に反して爪哇以東の海洋は支那航海者の至る者少く、殆んど航海し能はざる所なりしと想像せられたりき。而かも此想像迷信は獨り支那人のみならず、西方航海者もまた然か信じたる者の如し、」と說き、且つラッフル氏のジャワ史にバリー島以東へは西方人が、その間の海峽の潮流激しくして再び歸ることが出來ないので渡ることが不可能であつたと考へ、且つそれより東への航海を敢てしなかつたといふ一節を引き、「之を周去非の尾閭所泄非復人生との言と比較せば、何ぞ夫れ類似するの甚しきや、蓋周去非の此言決して自身一已の想像にあらずして、必ずや西方航海者より聞知したる所なるべし、」と論ぜられてある。我等の考へを以てすれば西方人卽ちアラビヤ人は十一・二世紀以前にはバリー

以東に航海しなかつたことはラッフル氏のいふ如く略々推定して誤りがないけれども、支那人も同様であつたといふことは決していへないのである。支那人にしてジャワより東進した者もあつたであらうが、支那よりフィリッピン群島乃至印度支那に沿ふて南下し直接にモルッカ地方へ航海した者も少くはなかつたと想像し得る。乃ち前にもいつた如く、宋代には既に麻逸・渤泥がその交通の範圍に加はつてゐるのはそれを推察するに足るべき一根據である。それ故に嶺外代答の著者の如きは當時ジャワ以東の諸島の智識に不足する人であつたのは、前引の丁香樹・肉荳蔻樹の記載に於て當代本草書並に諸蕃志よりも遙かに少なくまたは皆無に近いことに由つて推測せられるから、その地理上の記載に頗る莫然たるものがあり且つは誤謬も見出されるのは決して怪しむに足らない。從つて「爪哇以東の海洋は支那航海者の至る者少く、殆んど航海し能はざる所なりと想像せられたりき」とは決して考へられないのである。

尙前出のジョアン・デ・バロス及びドアルテ・バルボーザの記すところに從へば、十六世紀初頭のポルトガル人が諸島へ渡つたときには、中央に穴があつて千枚毎に紐を貫く銅貨が流通してをり、土人はそれを以て交易の支拂ひに充てたといひ、且つそれはマラッカ以東の何處にも通用してゐる支那の銅錢であるといふ事實は、これ亦宋代の支那人モルッカ交通を强固に支持する一證である。何故なら藤田博士[註28]及び桑原博士[註29]が宋一代を通ずる銅錢の海外流出を說かれるところに依つて、その宋の銅錢に外ならぬことは疑ひがないからである。唯銅錢流出の傾向は唐代に發したこと、且つ元代に殆んど鑄錢が行はれ

ずして宋錢が用ゐられたことを考へれば、モルッカの支那銅錢輸入が宋を中心とする前後の時代に亙るものと見做さねばならないのであらう。

註1、最も手近な我が國の學者の如きも、例へば藤田博士の「宋代の市舶司及び市舶條例」の市舶原流のに關する一節、桑原博士の「蒲壽庚の事蹟」一八―二〇頁、中山久四郎博士の「唐時代の廣東」（史學雜誌二八ノ三―六）があり、ヨーロッパの學者の著書論文に至つては數多いからここには擧げない。前記の日本の三學者の論說は多く大食人の支那渡來に研究の主力が注がれてゐるが、南海諸島人との交通も亦詳しく關說せられるのである。

2、桑田氏前引書三一―三五頁參照。

3、光緒十五年刊日本殘闕本卷十二、沈香の項。

4、證類本草所引。

5、證類本草卷十二所引。

6、證類本草、本草綱目所引。

7、證類本草、本草綱目所引。

8、海藥本草、但しこれに按山海經云と附するのは李殉の謬りであり、恐らく先人の執れかの書に出でたことを意味するのであらう。

9、H. N. Ridley, Spices. pp. 156. 177. 尙 J. Crawfurd, History of the Indian Archipelago. I, p. 495 et seq. も詳しく說明してゐるから參照せられたい。

10、Rebello, Informação das cousas de Maluco. p. 175.

11、Argensola, Conquista de las Islas Maluccas. p. 52.

12、新修本草が雞舌香と丁香とを別物とし、雞舌香を「樹葉及皮並似栗花如梅花、子似棗椽、此雌樹也、不入香用、雄樹着花不實、花採釀之以成香、出崑崙及交愛以南」となし、丁香を「根味辛溫主風毒諸腫、此別一種、樹葉似櫟、高數丈、凌冬不凋、唯根堪療

風熒毒腫、不入心腹之用非雞舌也」と記載するのは、共にこれを丁香樹の成育狀況、花及び子實の說明として首肯し難いのである。我等の考へではそのいふ雞舌香が沈香の一種とも見做されないから、新修本草の編者が他の植物と誤つたか、若しくは不正確な消息に從つて記述したのであらう。兎に角新修本草のこの記載は我等をして唐初並に前代の支那人の丁香に關する智識に少なからず疑ひを抱かしめるのである。

13、Crawfurd, History of Indian Archipelago. I, p. 505 に據れば、肉荳蔻の地理的分布はモルッカ諸島以外にアウストラリヤ、印度支那半島にも及ぶが、それらの地方の產額は少なく、古來有用なものは丁香の產地と限界を同じくしてゐる、また風味の佳い肉荳蔻はニュー・ギネヤ及びセラム、ジロロ、テルナテのモルッカ諸島及びアムボイナとボーロー島とに產した。オランダ領有以後それらの原產諸島より根絕し、バンダの三島に栽培を制限したといはれる。この說明には幾分の誤りがある。肉荳蔻の原產地がバンダの三島であつて、オランダ人渡來後バンダへ移植したのでないことは發見時代當初の凡ての記錄の肯定するところである。而して發見時代にはヨーロッパ人はバンダをモルッカ諸島中に數へずして、モルッカ卽ちテルナテとチードルとを中心とする諸島の丁香と、バンダの肉荳蔻とを並稱したが、バンダが現今モルツカ諸島中に含まれてゐる如く、その位置の近接するところより見て、モルッカ島群の一とするのは寧ろ至當である。

14、Gerini, Researches. p. 754.

15、東西交涉史の研究海南篇一〇四頁。

16、桑田氏前引書一〇七—一一〇頁。

17、本草綱目卷十四所引。

18、Bretschneider, Botanicon Sinicum. (T. C. B. R. A. S., XXIX, No. 1, III, p. 58)

19、Hirth & Rockhill, Chau Ju-kua. p. 210.

20、桑原氏、前引書一九六頁。

21、稻葉氏、前引書四九頁。
22、藤田氏、東西交涉史の研究南海篇三三二—三三三頁。
23、桑田氏、前引書九〇頁、一二四頁、一二五頁所引。
24、證類本草所引。
25、Hirth & Rockhill, op. cit. pp. 89, 210.
26、諸蕃誌と並んで當代南海方面の消息を載せる嶺外代答には白荳蔻・草荳蔻の產出に續いて荳蔻花の花狀が詳記せられてゐる。併しそれはモルッカ所產の荳蔻花の說明ではなくして、南方支那に生ずる草荳蔻の花の說明であるから、それを以て支那人の肉荳蔻觀察の證據とすることは出來ない。
27、史學雜誌十一ノ二。
28、藤田氏、東西交涉史の研究南海篇三八六、三八七頁。
29、桑原氏、前引書三二—三五頁。

四、元代支那とモルッカとの交通

宋に續く元代に於て政府の奬勵政策と相俟つて海外交通のいよいよ盛大に赴いたことに就ては、これ亦多くの研究の存するが故[註一]にここにはそれを贅言しない。而してモルッカ諸島への支那人の往來も、前代に引き續き頻繁に行はれ、丁香の舶載も多かつたことには多くの說明を要しないであらう。それに對して、我等は多數の元代の諸書を引用するの煩を避け、それを充分に斷定し得べき一資料を揭げるに止

める。乃ち元の汪大淵の島夷志略の次の一文を以てそれに充てやう。「文老古、地產丁香、其樹滿山、然多不常生、三年中間、或二年甎、有酋長、地每歲重、唐船販其地、往々以五梅雞雛出、必唐船一隻來、二雞雛出、必有二隻、又以呰之。」この文に見える丁香樹栽培と、支那船往來の說明の明確さには早一點の曖昧なところも見出し難い。唯ここにはその記載に現代のサンジバル島とペンバ島に於ける栽培期と幾分異るものがあるので、十六世紀末の觀察を載せるアルヘンソラのモルッカ誌に「二年每に九月より二月までに果を成し、或ひは三年每に成果す。」[註2]といふ一節をこれに對照して、十六世紀以前に於けるモルッカ諸島の丁香栽培收穫期が島夷志略に誤りなく傳へられてゐるとの一言を添へやう。

後に述べる如く、ヨーロッパ人はもとより、アラビヤの學者旅行家の記錄にも、十四世紀以前には丁香のモルッカ原產たることを傳へず、またモルッカの名をも記されないに拘らず、支那に於ては唐宋時代を通じてモルッカ往來の徵證が見え、元代に至つて確定的な航通と船載との記錄の存するのは頗る興味あることである。我等にはジャワ人・マライ人の記錄を見ることが不可能であるから、支那人をそれに較べて、その消息を記載し正確な所傳を存することの遲速を急かに斷じ難いとしても、兎に角支那のそれは世界に於ける最も早い消息であることを明言し得られる。このやうに考へ來るとき、島夷志略の文は少くとも十四世紀初頭の支那人がモルッカ諸島の丁香を船載したことを確定するが、それにも拘らず、この一文よりモルッカ諸島の名の詮議をなして、その疑點を正すべき一問題が殘されるのである。

何故なら、モルッカと同一の音を傳へる文老古（Wen-lao-ku）が東西を通じて島夷誌略に於て初めて記載せられるからである。

いまその名儀の由來を尋ねるに前だつて、今日まで唐代七世紀中既に支那人がMi-li-kiüの名を傳へたといはれることを一考する必要がある。我等の知る限りに於ては、それはグレネヴェルト[註3]がバリー島を說くに當つて唐代史中に特に記事を載せずしてこの名を傳へたと述べるところに胚胎するものであり、またその後ユール氏の引くところに據ればスキーツの書[註4]に踏襲せられ、且つユール氏はこれに疑ひを挿まずして恐らくアラビヤ語に出づるのであらうと推測した。而してグレネヴェルトの稱する唐代史の文といふのは、その指示する如く、晉劉昫等の著した舊唐書（卷一九七）の「隨婆登國在林邑南、海行二月、東與訶陵西與迷黎車接、北界大海、」中の迷黎車であつて、その述べる如くme-le-keuと發音せらるべきである。併しそれに就ては、最近の桑田六郎氏の「三佛齊考[註5]」中に、「東與訶陵西與迷黎連接、北隣大海[註6]」の連接の連が、他書では車となり、唐書では迷黎車を國名としてゐる。連接の書き方は晉書（卷五七）陶璜の傳にも連接扶南の例あり、又舊唐書（卷一九八）天竺の條にも東天竺東際大海與扶南林邑隣接西天竺與罽賓波斯相接とあり參考になる。迷黎は義淨の末羅瑜（或遊）と思はれるから、婆登は西部闍婆でなければならぬ。」といふ說に由つて迷黎車の車を國名中に加へてはならぬこと、また迷黎がモルッカを限定しないことが斷定せられたといつて差し支へがない。

然らばモルッカ諸島の名の記載を遡源して元末卽ち十四世紀始めに限定せらるべきか、それともそれより如何程の期間をそれに前置せらるべきかは、この問題と關係があり、且つ名儀詮鑿の主要な目標となるのである。ユール氏[註7]の說く如くポルトガル人が初めて Maluco といつたからである、との記錄がないとしても、ポルトガル人が十六世紀の初頭に諸島の消息を耳にし、諸島に渡航した當時には既に Maluco またはそれに近い語が諸島及び近隣の住民と貿易商人とによつて語られてゐたに違ひない。然るにダルガード氏がアジヤ諸國語彙中に、十六世紀在印度ポルトガル人の採用した類似音のアラビヤ語を引いて論ずるところ[註8]に從つて Maluco は國を意味するアラビヤ語 mulk に出でたと見做されやうか。またワレンタインの新舊印度誌中に諸島の島毎に王を頂いたといふ事實[註9]に從つて、ユール氏がワン・ムスヘンブルックを引きアラビヤ語の王を意味する mulūk より出で王の諸島卽ち Jasirat-al-Mulūk をその根源であらうと想像することが出來やうか。或ひはまた所有者を意味するアラビヤ語 Malak[註10] に關する起源を有するのであらうか。Maluco の由來するところを、このやうに未だ確定することが出來ないけれども、アラビヤの一語に發してゐるのは略々推測して誤りがないやうである。若しこの推論にして是認せられるならば、次にアラビヤ語の勢力が今のオランダ領マライ諸島に及んだ時期を限定するの必要が生ずる。何故ならアラビヤ人は十四世紀頃には未だモルッカへ渡らなかつたけれども、その語はマライ人やジャワ人の用ゐるところとなり、またそれらの人々を介してモルッカに及んだことが否定し難い事實だ

からである。

七世紀前半にアラビヤ半島を一統して地中海沿岸にその勢力の一端を初めて伸ばしたアラビヤ人が、東洋沿岸の貿易をなしその文化を傳播したのは七世紀末に始まり九・十世紀に全盛に達し、十五世紀まで久しくその餘勢を殘すのである。それ故にその文化及び語の遠くマライ地方に及んだのは、後に委說する如く少くとも彼等の全盛期より多く遡るものではなからう。

さて、元代卽ち十四世紀前半に於て支那人が島夷志略中に文老古として傳へてゐるのは諸島のアラビヤ語系名稱の最初の記錄であるとしても、その以前に於てこの名が諸島附近の住民または諸島人によつて稱せられたに違ひない。併し、果してそれに就て幾何の年數を遡源し得るべきかを知り難い。前に唐・宋時代の支那人のモルッカ渡航の事實を推論したが、我等の引用した書にはもとよりこれに類する名稱のみならず、モルッカ諸島の名に該當するものすら殆んど傳へられてゐない。唯諸蕃志に肉荳蔻の產地として黃麻駐と牛崙とを載せる例外があるのみである。これを以て文老古またはその類似の名稱が宋代には未だ存しなかつたといふのではない。併し我等に憶測が許されるならば文老古の名稱は元代またはそれより遠からぬ時代より諸島の名稱として外來貿易者の用ゐるものであり、諸島の土人間には總體的な名がなくして島毎にまたは部落毎に異なる稱呼が用ゐられたのであらうか。それ等の點に關する研究が既に行はれたかも知れないが、不幸にして未だそれを見てゐないから、將來に現れることを期待

しやう。

下つて明代の諸書に見える丁香及びモルッカ諸島を瞥見しやう。當代の海外の消息を載せる諸書、例へば費信の星槎勝覽、馬歡の瀛涯勝覽、黃省曾の西洋朝貢典錄、嚴從簡の殊域周咨錄、鄭曉の皇明四夷考にも、歷代本草書を參照編輯し著者の識見を加へて大成した明末李時珍の本草綱目にも、モルッカ諸島の消息が見えず丁香の產地が明記せられずして、南海諸國の項中に分置せられてゐるのは、決して明人がそれを知らなかつたことを示すのではなく、唯それらの著者がそれに對する粗雜な智識を有したことを物語るに過ぎないのであらう。またそれと同時に明代支那人の海外諸國通商が前代に比して一時的に衰へたから、從つて南海方面に對する關心の稀薄さを物語るのであらう。併し、明人の悉くがさうではなかつたことを證し、且つ明末に於けるヨーロッパ諸國人の東進と、彼等の間に東洋南海諸國の爭奪が行はれたとき、それに注目を拂ひそれらの國情と產物とを正視した人の多かつたこととを徵して知るべきは張燮の東西洋考の如き書の存在である。同書にはモルッカ諸島の政情と形勢とが詳かに說かれ、丁香の產出狀態が古來の孰れの書にも優れて傳へられてゐる。

以上に支那及び支那人の丁香舶載並にモルッカ諸島との航通の歷史を稍々冗長に論述したが、ここに改めてそれを要略し、歸結するところを明瞭にしやう。

後漢代卽ち西曆一・二世紀間には微かな丁香の消息が支那人間に現れ、且つ少量ながらその支那に舶

載せられたといふ徵證は知られる。三世紀前半の三國時代には南海方面に赴いた使者に由つて丁香產地が幾分限定的に傳へられ、晉代・南北朝代・隨代卽ち三世紀後半より六世紀に亙つては丁香の使用が次第に普及せられたが、唐初までは支那人の產地に赴いたといふ形跡が察せられない。唐代中頃卽ち六世紀末乃至八世紀間には、も早丁香は支那に缺くべからぬ香料の一となり、內外人殊に支那人自身がモルッカに至つて頻りに輸入したやうに思はれるけれども、それは推斷し難く、且つ未だモルッカの名稱を傳へてゐない。九・十世紀より十三世紀前半に亙る五代・宋代は香料使用の全盛期に當り、從つて丁香の渡來は前代未聞の盛況を呈し、且つ支那人のモルッカに航通したことも略々斷定せられ、その人數も決して少くはなかつたやうである。この時代の末にはモルッカの島名らしいものも不確かながら支那の書に載つてゐる。十三世紀後半より十四世紀前半の元代では、唐宋時代に推定せられた支那人のモルッカ渡航と、丁香樹の觀察とが、ここに至つて明確に斷定せられ、更に後世ヨーロッパ人の稱する諸島名モルッカと同樣の名が初めて支那人によつて記載せられるのである。

註1、桑原博士の著書、Yule-Cordier, Marco Polo ; Bretschneider, Medieval Researches ; Schlegel, Geographical note ; Rockhill, Note on the Relations and Trade of China with Eastern Archipelago and coast of the Indian archipelago during the 14th century 等。

2、Argensola, op. cit., p. 52

3、Groeneveldt, Notes on the Malay Archipelago and Malaca compiled from Chinese sources. p. 58.

4、Skeat, Malay magic.—Yule & Burnel, Hobson-Jobson. p. 576 所引。
5、桑田氏前引書六六頁。
6、唐會要、太平寰宇記の所載、桑田前引書同頁。
7、Yule & Burnel, op. cit., p. 575.
8、Dalgado, Glossario Luso-Asiatico. II, p. 17.
9、Valentijn, Oud en Niew Oost-Indien. I, mol. 3.
10、Pichan, Dictionnaire Etymologique des mots de la langue française derivées de l'Arabe, du Persan ou du Turc. p. 247.

五、西方人の丁香に關する智識

丁香の支那渡來を說いた後には、それと對照するために泰西に於けるそれを說くの必要がある。支那に於ける丁香史が未だ考究せられてゐなかつたけれども、泰西のそれは幸に不完全ながらヨーロッパの學者に由つて二・三の研究がなされてゐる。我等は今手許にあるハイド氏の近東商業史[註1]の研究とフィカリュ伯爵の印度香料の考察[註2]とを根幹とし、それに不足するものを他より補ふて簡略な丁香消費輸入の推移を說かう。

フィカリュ伯爵の述べるところでは早くは二世紀のローマの博物學者プリニウスが Garyophyllon の名を以てその著書 Caii Plini Secundi—Veronensis Naturalis Historiae, XII, 15 に記載することを指摘

し、それを正しく丁香と見做すには幾分の疑ひが殘されるといふ。[註3] 十六世紀のガルシヤ・ダ・オルタは、プリニウスのガリオフィロンを、胡椒に似た粒にしてそれより大きく、脆弱であつて、正しく丁香であらうと考へた。オルタの香料誌の英譯註釋をなしたクレメント・マークハム氏はそれを確に丁香に相違ないと斷言する。[註4] その後六世紀のアレクサンドリヤのコスマス・インディコプレウステスの著書中に丁香の名が見え、今のセイロン島を超える遠い彼方より齎されるといふ。同世紀末にもパウルス・エギネタの記錄がある。[註5]

中世の始めヨーロッパ諸國に於て丁香は早くも一般に用ゐられ、藥用に、料理の藥味用に、芳香飲料の調製用に供せられた。嘗てアルザス州ホンベルグなるアルジャンツアリヤの地下墓地の發掘が行はれたときフランコニヤ產の小函中より古代の物品が發見せられ、丁香も亦そのうちに殘つてゐた。これはヨーロッパ人の丁香使用に關する現存の最も古い資料である。[註6] 推察するにそれは七世紀を下らぬ時代の輸入を示すもののやうに思はれる。また西フランクのカロヴィンジャン朝時代の一勅令中に調理用の胡椒・肉桂・丁香を求めるための旅行に勅許を與へたものがある。[註7] それは略々八世紀後半に於ける丁香傳播の程度を物語るのである。ハイド氏は尙 Dümmler, Sanctgallische Dankmale aus der Karolingischen Zeit (M. A. G. Z. Vol. XII, p. XI) を引いて當時の料理書の多くがこの香料の使用法を載せ、從つて弘く藥味として用ゐられたと說き、また七一六年の Diplôme de Chilpereic, II に據つてローヌ河口より

フランスへ輸入せられたことを擧げて、丁香が八世紀以前より久しくヨーロッパに於て商品として取引きせられたに違ひないと論ずる。併しその後十字軍の東方往復は東西の物産の交易にも著大な影響を與へた。ハイド氏は Assis de Jesus. II, 174 を引いて、ジェルサレムにアクル王國の存在した間はその地が香料取引の重要な市場となり、丁香も亦その主要なる商品の一であつたことを傳へる。この十字軍時代に於ては、タウリス、スルタニエ、コンスタンチノープルを經由し、またはアデン、メッカ、アレクサンドリヤ及びキプロスを介して東方の物資が輸入せられ地中海諸港に達した。フィカリュ伯の指摘するところでは、一二二八年のマルセイユ、一二五二年のバルセロナの關稅表には丁香が記載せられ、また一三四〇年の事實を載せるペゴロッチの書にはコンスタンチノープルで賣られた香料中に丁香をも載せてゐるといふ。ハイド氏は十一・二世紀以後のヨーロッパ諸國に於ては Douet d'Areq, Comptes de l'argenterie, と Bourquelot, Foine de Champagne, I, p. 287 とに據つて、ヨーロッパ諸國の藥店が齊しく丁香を常備し、一般庶民の日常生活に於ても王公の家の如くにそれを有せぬことを恥とした、それ故に Menagerie de Paris と Petit livre de cuisine 及び Buch von guter Speise とに從ひ、丁香は上下の階級を通じ最も嗜好せられる藥味であつて、牛肉にも、腸詰にも、葡萄酒にもそれを加へて食膳に上せたといふ。併し、當時甚だ安價であつたとはいはれない。Leber, Appreciation de la fortune privée; Cibriano, Economia politica del medio evo; Flückiger & Hanbury, Pharmacographia に由つて見れば少くとも胡椒の二倍乃

至三倍の高價を維持したといふ。フィリカリュ伯に據れば、事實に於て丁香の價が甚だ高く、一二六五年のイギリスのライセスター伯爵夫人の自家出納帳には一リブル（十六オンス）に就き十乃至十二シリングと記され、一三七二年に於けるフランス女王ジャンヌ・ド・エブルーの遺言執行計算書に一リブルが當時の金一リブルに評價せられてゐる。この一リブルは大戰前のフランス貨約九フラン餘の價を有するが、貨幣の事實上の價値、卽ち商品と生活上の需用と金との比率は、當時に於ては現代の六倍であつたから、一リブルは五十六フランであつたわけである。これは丁香の嗜好が胡椒に倍するものであつたことを物語るよりも、その需用に對する供給の寡少に因するものでなければならない。少くとも丁香の產地が遙かに遠く、これを諸國に於て賣られるまでには長い危險な道程を經て來たからである。また一方ではその產地の知られなかつたといふ神祕的な原因にも由來するのであらう。

さて然らば泰西諸國人は丁香の產地に就て如何に考へたであらうか。

上古に於ては頗る漠然たる產地に關する方向が想像せられたことは事實である。乃ちギリシャ人以來諸香料と共に東洋に出ることは彼等の知るところであつたが、その何國より來るかを確かに指示することが出來なかつた。何故なら彼等の地理的智識の範圍が東洋及び南洋諸國に及ばなかつたからである。前にも擧げた如く二世紀のプリニウスは印度に胡椒に似て少し大きな粒がありカリオフィロンといはれると傳へ、六世紀のコスマス・インディコプレウステスは丁香をセイロンの市場で見たが、それより

も遙かな遠方より來ることを聞知したと記した。中世にはアラビヤ人が東洋諸國に通商し、その到達し見聞した範圍は遙かに印度を越えて支那にさへ達した。また諸香料をその最も重要な交易品として東西に舶載したことも明かに知られてゐる。乃ちセイロンの諸港、コーラン、カリコの如き印度市場に於て彼等は他の多くの商貨と共に丁香を積み、その慣習の航海に由り一方ではペルシャ灣の奥地へ運び、他方では紅海岸の諸港に陸上げした。それより陸上をコンスタンチノープル、トリポリまたはアレクサンドリヤに達し、更に地中海諸港に舶載せられたのである。而して前に我等の說いた如く、支那への丁香舶載にも少くとも宋代にはアラビヤ人がそれに加はつてゐたのは疑へないやうである。それ故に丁香の產地が彼等に由つて明かに泰西へ傳へられるべきであると思はれるが、事實はハイド氏の說く如く、「支那に航通するに當つて、モルッカ諸島を遙か右方に見棄ててゐた。それ故にその旅行家・學者がこの原產地を記すとき、印度または附近の諸島より來るといふ茫漠たる手段を以て滿足した。」或はまたいくらかでも精細な報告を得るときには、無頓着に不正確な島の名を擧げ、ときにはジャワやセイロンに丁香樹が生ずるとさへ認めた。併し、他面よりそれを見れば彼等が丁香の產地を探索するに及ばなかつたとしても、年と共にその地理的範圍を狹め行き、自らにその見聞が原產地に近づかうとする傾向は認められる。ハイド氏及びフィカリュ伯の指摘する次の二・三の記錄はそれを示すのである。九世紀のイブン・ホルダトベーはスマトラのファンクールの產物として丁香・檀香・肉荳蔻を紹介し、十二世紀の地理學

者エドリシーもこれをジャワの産物と說いた。[註8] 十四世紀初半のイブン・バッタはスマトラ島を訪ねてその島に丁香樹を實見したと記した。[註9] 當代に於て東方へ旅行したヨーロッパ人も、例へば十三世紀末のマルコ・ポーロがガインドウ卽ち支那四川南部貴州北部に丁香樹の生ずるといひ、またジャワの物産中にもそれを數へ、印度洋上のニコバル諸島にすらそれを發見した。[註10] 十五世紀にはニコロ・コンチがマルコ・ポーロよりも一歩を原産地に近く進めて、ソンダイ及びバンダンの二島があり、そのうちバンダンのみに丁香を産することをジャワの住民より聞いたと語つた。[註11] コンチの誤聞はフラ・マウロの世界圖中にそのまま載せられるに至つた。

以上の如き上古中世を通じて泰西の諸學者旅行家の指摘して丁香に關するその産地と實見地として傳へる地名は、殆んど皆丁香が目的地に達する前に通過する市場であつた。印度またはセイロン島に於て丁香が見られたのは、當時東方諸國人恐らくは支那人またはマライ人に由つて印度まで舶載せられ、そこで西方人の船に積み換へられたからであらう。十二世紀末に於てさへ、マルコ・ポーロは、支那船がマラバルの諸港まで極東南海の物産を運んだこと、それよりアデンを經てアレクサンドリヤへ向つてそれらの物産を再度船積したことを傳へてゐる。[註12] ジャワは同樣に一大取引場であつて、モルッカ諸島より積み出した丁香は先づここに集つて、それより印度及び支那へ散布せられたであらう。かうして集散市場を經由する毎に、その原産地の正しい消息が失はれて、終には市場の名を以て産地と見做すやうに

なつたが、時代と共に旅行者の達する範圍が廣くなり智識も眞實に近づいて行つたのである。ニコロ・コンチの聞知の如きは、フィカリュ伯の推察する如くモルッカよりバンダへ、バンダよりジャワへ、ジャワよりセイロンへ運ばれたことを暗示するものか、ハイド氏の想像する如く肉荳蔻と丁香との混同またはその產地の無差別に由る誤りであるかは定め難いとしても、少くともモルッカに極く接近したところまでその智識が屆いたことを表明するのである。而して、マルコ・ポーロのガインドウにあるとする樹は肉桂樹の一種の誤認であり、ニコバルに於けるそれも恐らく類似品との混同であらう。イブン・バッタのそれはジャワ、スマトラの市場に集散する丁香をそこに產するものと想像し、そこに丁香樹が生ずるとまで臆測した故か、或ひは肉桂樹等と誤つた故であつて、彼がそれを實見したといふのは疑はれねばならない。

さてこのやうに中世を通じて十五世紀までの泰西人の諸書に丁香の產地モルッカの名が現はれず、從つて彼等が略々その近くまでの消息を得ても、モルッカそのものを知らなかつた。併し、その間モルッカ諸島より見るときはこの諸島が泰西諸國と何等の關係をも有しなかつたとはいへないのである。我等も前に論じた如く、少くともアラビヤ人より間接の影響を受けたことは否定出來ない。その點に就てはヨーロッパの學者も未だ論じてゐないやうであるから、ここにそれを說明してをく必要がある。

七世紀末に既にアラビヤ人・ペルシャ人が東洋の通商貿易に從つたことは、唐高宋の代に義淨が印度

へ赴くに廣東より乘つた船がペルシャ船であつたこと、[註13]唐會要に澄聖元年のアラビヤ・ペルシャ兩國人の入貢を記すことに據つても知られる。而して、八・九世紀を通じて既に南支那には多數のアラビヤ商人が滯在した。[註14]彼等の通商はその後多少の盛衰斷續があつても、唐代・五代・宋代を通じて繼續した。このやうにして極東へ航海したアラビヤ人がその途中に於てもその通商地・寄港地を見出しそこに彼等の勢力を植えるのは當然の事實である。彼等の最も早く印度に勢力を得たことはさて措き、我等の注目するマライ諸國に於ける形勢の一端を指摘しやう。但し我等の回教徒の東漸に關する智識は頗る不完全であるから、ここには諸學者の著書中に遇目した數例を擧げるに止める。九世紀中頃に東洋を旅行したイブン・ホルダトベーはスマトラ島のラミニ[註15]後のランブリに寄つて委細な風土・產物を傳へてゐるのは、やがてアラビヤ商人の貿易港たるべきを暗示するものである。またこれと殆んど時代を同じくする唐末段公路の北戶錄に「占卑國出偏核桃、形半月狀、波斯人取食、絕香美」とある占卑を桑田氏はスマトラのジャンビであらうとせられるから、[註16]これ亦ペルシャ人のスマトラに出入したことを語る一記錄と見做されやう。尙グリニ氏に據れば[註17]九世紀のアラビヤ人の集合地であつたベツマがシンガポール島の內またはその附近であるといふ。而してこの世紀に於けるスマトラのアラビヤ人に就ては舊唐書卷一九七、新唐書卷二二二にも略々それに通ずるの消息が載つてゐる。更に十世紀に入ると、先づ唐天祐元年佛齊國の都蕃長蒲河粟遠將軍の支那へ使したことが唐會要・冊府元龜・文獻通考に見えるが、[註18]桑田氏は南海諸

國の使者中の支那文獻上に現れた蒲姓の最初の人であり、これをアブル・ファヅルのやうな名の轉寫と見做されやうといふ。その後淳熙五年に至るまでの十數回に亙る三佛齊國使の渡來を同氏は詳考せられてゐるが、その殆んど大部分はアラビヤ人またはその系統の頭人であることは首肯せられる。それ故にまた同氏の說く如く室利佛逝より三佛齊への國名の變化も回教徒の發展と關聯してゐるから、スマトラ北部に於ける彼等の勢力が既に重要視せられねばならないと考へやう。スマトラ島に就てはその後にも、十三世紀のマルコ・ポーロがこれをジャワと誤り、フェルレッチ卽ちペルラック港に回教徒が多いことに留意したから、少くとも同島北方港市には既に回教がかなり廣く弘がつてゐたと見做される。ここには主としてスマトラのことのみ指摘して、ジャワ及びジャワ以東の諸島の回教徒に就てはこれを說くことが出來ない。その故は十四世紀以前には殆んど孰れの書にも記載せられてゐないからである。事實に於て十四世紀以前の西方人にしてジャワ以東に旅行しその見聞を記したものが皆無に近いのである。我等はスマトラ北部及びマライ半島の一部の回教弘布を以て他の諸島のそれに及ぼさうと考へるものではないが、少くともそれは參考に價するものとしやう。

いまジャワ史を說く諸書の記載を綜合すれば、回教の同島侵入は十五世紀初頭に端を發して次第に勢力を植えたといふことになつてゐる。乃ちマライ半島の大部分と同時またはそれより少し後れて布教が行はれたのである。併し我等の想像するところでは、それより早く既にジャワは勿論ジャワ以東の諸國に

も回教徒の渡航があつたのであらう。ポルトガル人がモルッカ諸島發見直後の報告中に、「この諸島の住民はその大部分回教を信ず。彼等はポルトガル人のそこに赴く以前にそれに改宗したるなり。殘餘の人々は異教徒にして、孰れも貧乏なり。」[註19]と見えるのは十五世紀以前に布教の行はれたことを示すのみで、何時頃までそれを遡源し得べきかを暗示してゐない。併しまた諸島に各種の土語の分離することを述べて、「テルナテ語は予の知りたるところにては、多くの語より構成せられ、殊にグザラテ語とその類似の語彙より成る。ラテン語・ポルトガル語・ペルシャ語・アラビヤ語をも受く」[註20]といふ消息には、ラテン語ポルトガル語のポルトガル人に由る影響を除いて、他のアラビヤ語・ペルシャ語は勿論、その主要語となつてゐた印度のグジェラット語の普及が傳へられ、少くともグジェラット人の回教布教とその文化的勢力の根柢が深いことが推定せられるのは決して短日月の彼等の活動の結果とは思はれない。同じい消息はモルッカに於て或る樹木の枝からとつた綿にバル Baru と名づけるが、印度ではベル Beru といはれてゐることを述べ[註21]、またアルブケルケのマラッカ占領當時この諸島にはジャワ人・支那人・グジェラット人が盛に貿易をなして利を得てゐたことを傳へる[註22]のはこの推定を援助すべき間接の記錄と見られないであらうか。而して回教の布教がアラビヤ人・ペルシャ人直接の活動に由らずして、主としてグジェラット人・マラバル人布教師の力であることはヴィンスッド氏の論ずる如くであらう。また初めて太平洋を横斷したフェルナン・デ・マガリャンエスの船隊の一員ヒネス・デ・マフラの一五二二年の航海日誌[註24]

に據れば、モルッカ諸島の一なるチドール島の王はアルマンソル（Almançor）と稱せられたといふが、それは明かにアラビヤ風の名である。また同船隊の無名船員の日誌[註25]にはディガサン島よりモルッカ諸島へ向ふためにその地方の海上の案内に通じた三人の回教徒を雇ふたといふ。それらの記錄も亦回教徒の諸島に於ける活動が强固な根底の上に立つてゐたことを物語るものでなければならない。

その上元末の島夷志略中にこの諸島をアラビヤ語より轉化した文老古を以て稱せられてゐることも、これ亦十四世紀初頭には回教文化が或る程度まで主要な島々の要路者に受け容れられてゐたと見らるべき一證を供するものではなからうか。而してポルトガル人の聞知したところに據れば、十五世紀に於けるモルッカ諸島の貿易は、前にも述べた如く、ジャワ人・支那人・グジェラット人のなすところであつた、殊にジャワ人は諸島人のために食糧品・武具を舶載して丁香を求め、都合の良いときには同諸島で四キンタルのバスタンまたは一人當てに二百カテに當る十九アラテルを集めて積み出したといふ。[註26]また諸島の一なるセイラン島は十六世紀中に於てもポルトガル人の通商範圍外にあつて、ジャワの商人が盛んに往來したが、多量の荳蔻花と肉荳蔻とを產することを吹聽したといふ。[註27]また事實に於て舊く諸島に輸入せられた支那錢は、久しい年月を經て十六世紀初頭にはジャワへ流出してゐたのである。我等はこれらの頭る乏しい消息に據つて十五世紀中若しくはそれより幾分か遡る時代に、モルッカ諸島の通商が主としてジャワ人に左右せられ、また印度人と支那人もこれに關與してゐたといふことを推察するので

ある。その以前には諸島人も回教普及以前に文字を有せずして舊い傳說を傳へるのみであり、附近の諸島人もモルッカ諸島の記錄を傳へてゐないから正確に近いことは不明であるが、十六世紀末にゴウディニュ・デ・エレディヤが說いた「世界の各地とこの南印度（南海）のこの港（ジャワの一港）との間に通商あり。ここより金・丁香・肉荳蔻・檀香その他の香料・財寶の船荷出で　東印度及びカタイの諸港に赴く。殊に知らるる如く、カタイの諸港と紅海との諸港へ向けられたり。」[註29]と推察する如く、中世に於てはモルッカの產物は主として丁香と肉荳蔻とであるが、それはジャワへ集められてそれより支那と印度の方面へ船載せられたであらう。同樣のことはスマトラ島の北部に就てもいへる。

然らば中世に於けるジャワとモルッカ諸島との關係は如何であつたか。我等は一般のジャワ史に據つて八世紀に於けるサンナハの活動、十一世紀に於けるエルランガの活動、十二世紀に於けるケジリ王國の强大、十三世紀のケルタナガラ王の勢力を知り、ジャワの勢力及び影響が四隣に及び、殊に最後の十四世紀には確かにモルッカ諸島もその貢屬國となつたことを敎へられるが、併し、その王家の活動がジャワ商人の通商上の勢力並に範圍に影響したかどうか、またジャワ人のモルッカ諸島航通の起源は何年頃かといふことは少しも分明でない。彼等（卽ち支那の訶陵國人）は七世紀以來屢々支那へ入貢してをり、十二世紀にはアフリカ東岸のソファラにも赴いて貿易をなしたのであるから、モルッカ諸島の如き近い處へは勿論それよりも早く航通したであらうと考へて差し支へがない。唯上古のジャワ人がモルッ

カ諸島の産物に如何なる程度まで執着したかといふことは疑問であるから、それを考慮に入れてその頻度を想像して見る必要があらう。

註 1、Heyd, Histoire du Commerce du Levant au moyen-agê. Laipzig, 1923.

2、Orta, Colloquios. Ed. annotada pelo Conde de Ficalho.

3、Colloquios. I, p. 68.

4、Colloquies on the Simples & Drugs, by G. da Orta. Translated by Sir Clement Markham. p. 213.

5、Colloquio. loc. cit.

6、Heyd, Histoire. II, p. 603. not.

7、Roziere, Recueil général des formules. II, p. 984—Heyd, II, 604 所引。

8、Ibn Khordadbeh, éd. Barbier de Meynard. pp. 288, 249 ; Edrisi, Geagraphie. I, 82, 89, 93.

9、Ibn Batuta, Voyages. IV, 228, 240, 243, & seq.

10、Yule, The book of Ser Marco Polo. II, pp. 385, 561, 580.

11、N. Conti, apud Ramusio, Delle Navigatione e Viaggi. I, 46.

12、Yule, The Book of Ser Marco Polo. II, p. 654.

13、南海寄歸傳卷一。

14、Van Rankel in Encyclopaedia of Islam. Fasc. I, p. 551. 桑原氏前引書、九頁以下參照。

15、Ferrand, Relation de Voyoges. p. 56

16、桑田氏、前引書四七—四八頁。

17、Gerini, Researches on Ptolemy's Geography of Eastern Asia. p. 200.

18、桑田氏、前引書七七頁以下參照。
19、Rebello, op. cit. p. 155.
20、Ibidem. p. 158.
21、Ibidem. p. 177.
22、Ibidem. p. 200.
23、Winstedt, Shaman Saiva and Sufi. p. 166 et seq.
24、R. S. G., Tres Relaciones. p. 210.
25、Obras Completas de Cardeal Saraiva. VI, p. 132.
26、Rebello, op, cit. p. 174.
27、Godinho de Eredia, Informação verdadeira da Aurea Chersoneso. p. 142.
28、Rebello, op. cit. p. 156.
29、G. de Eredia, Report on Meridional India (J. M. B. R. A. S. Vol. VIII, Pt. I. p. 262)

六、丁香の名義に由る考察

東西諸國に於る丁香の名稱を詮議することも亦丁香舶載の歷史を究めるに大いに援助となるものである。ギリシャ語 garyophyllon はフィカリュ伯がフリュッキゲル及びハンブリーの說を承けて述べる如く、小さな胡桃に似た花瓣の蕾中に作る形狀に出でてゐるが、この語の綴音に異動があることはギリシャ本來のものではなくして、東方より傳來したことを示し、またアラビヤ語の Karanfel がこのギリシ

ヤ語と同源より出てゐる。[註1] 古代ラテン語の clous 以下のヨーロッパ諸國語では、ドイツ・オランダ語の直接に釘を意味する Nelken, Nägelhen, Nagellen の語を以て稱する外は、孰れも同じく釘の意を有する clove, clou, (girofle,) chiovo, clavo, cravo に變じ、前掲のギリシャ語及びアラビヤ語を母としてゐることが明かであるが、それは我等の追求する丁香の求心的方向に反するものであるから詳しくは述べない。

さてディモックに據れば、ギリシャ語・アラビヤ語の名は印度ドラヴィダの一語たるタムール語の Kirámbu 及びマライ語の Karámbu と關聯せられねばならないのである。[註2] 換言すれば丁香の原産地に近づく國の順序に從つて、マライ語よりタムール語に、タムール語よりアラビヤ語・ギリシャ語に入つたことを暗示するのである。[註3] 併し正しくはこの考へは逆に追はるべきであらうと思ふ。乃ちジョージ・ワット氏が想像する如く、[註4] タムール語に源を發するこの語が一旦アラビヤ語に入り、回教徒の活動を介してマライ語中に侵入したものと解すべきである。これはペルシャ語の Mekhak が獨立して釘の形より取られる如く、印度南部に起つた語であらう。但しマライ語のカラブは耳輪を意味する。

而して、印度に於ける最古の名はサンスクリットの lawanga であり、ワット氏はトーマス氏の言を引いてその最も早い記載は Ramayana 中に見出されることを指摘した。且つ印度の近代語中に lavanga, lavinga, lavang, laung, langa, lóng, raung と變化して傳へられてゐることを述べ、更にトーマス氏の說卽ちこのサンスクリットの語源はマライ語であるらしいこと、その外形がマライ語に近いこと、マライ

語では bunga lavang が慣用せられ、bunga は華美または彩色、特に花を意味し、lavang が荳蔻花を意味するとの文を轉載してゐる。事實に於て、十六世紀初頭の訪問者ピガフェタに據れば、モルッカ諸島のうちのサランガ島に於ける丁香の名は bongalavan であり、[註5] 同じくポルトガル人ガブリエル・レベロに據れば、モルッカ一般の名稱は Bũa Lauoa であつて、ブンアは花を、ラヴォアは樹を意味することとせられてゐる。[註6] 十八世紀に久しくアンボイナに住み恐らく丁香樹とその取引とに親しんだと思はれるランフィウスは、丁香が近代マライ語では tjancke であり、古代マライ語では bugalawan である、アンボイナで buhulawan、テルナテで boholawa、チドールで gomede と稱せられるといつた。[註7] クロフォードは lawanga をボルネオ島に於ける丁香の名として、肉桂樹の一種なるが故に丁香樹に與へられたやうに解し、[註8] 且つマライ人がこれを用ゐたのは印度より印度商人がその語を携來したからだといふ。[註9] それ故にジョージ・ワットが、lawanga が肉桂のうちでもセイロン原産肉桂[註10]に對するタムール語であるとなし、疑ひもなく印度語であり、多分五世紀以前には印度では丁香として用ゐられなかつたと推察した。[註11] ガブリエル・フェラン氏はタムール語の丁香は ilavangappū であつて pū は花、ilavanga は釘を意味し、ケルンのこのタムール語 ilavanga を多分ドラヴィタ語の一より轉じたと思はれるサンスクリットの lavanga に結び付ける說を引き、またマライ語のタムール語と同樣に釘の意味を有する lawan 卽ち花を意味する būna と連結して丁香 būna lāwan となることを擧げて、タムール語に發してサンスクリットに入り、

それよりマライ語に轉じたと考へた。[註12] ダルガード氏も亦ラワンガがサンスクリットに於ける lavanga、タムール語に於ける lavangam, elavangam を認め、[註13] 十六世紀に印度にゐたディオゴ・デ・コウトは、ブラマンの醫者がラワンガの名で丁香を知つてゐるが、同時に回教に由る名をも用ゐると述べた。[註14] これらの所說は皆相異つてゐる。殊に lawanga の意味に於て混雜してゐるけれども、その點では我等はこれ等の諸國語に通じない者であるから是非するの資格を有しない。唯ドラヴィダ語の一種なるタムール語に發して、フェラン氏の說の如く、北はサンスクリットに入り南はマライ語に混じたといふことは略々推定し得、從つてドラヴィダ人種のうちにマライ諸島に赴き丁香を目擊した人々または丁香の印度に齎らされた後それを實見した人々の命名にかかることも推測し得られ、またクロフォードの考へに反し、恐らく五世紀よりも遙かに早くから存在したとも思はれるのである。而してマライ語に於けるラワンガがカランブよりも早くより用ゐられたことは略々斷定し得るのである。

次にピガフェタがモルッカ諸島に於て Chianche といふと述べ、ディオゴ・デ・コウトも亦モルッカでは Chanque と稱せられると傳へ、[註15] 十六世紀末のアルヘンソラのモルッカ誌が「マルッコ人は（丁香）樹に Siger、その葉に Varaqua、その果實に Chanque と稱す」と記す名稱に就て考へやう。[註16] ランフィウスの時代にもその當時の語として tjancke が用ゐられたといふ。ダルガード氏は chengkeh または chingke となして、マライ語の花を意味する bunga に前だつものであると說く。クロフォードは支那人が極め

て早く丁香を取引するためにモルッカに來たといふことを前提として、ジャワ及びセレベスの住人間に用ゐられるチャンケが恐らく支那語の訛りであらうと見做した。[註17] 而してそれは前にランフィウスの示す如く、支那語の丁香（ting-hiang）より來たと推察するのである。フィカリュ伯及び一九一〇年版リンスホーテン東印度誌の註者ケルンも亦その説に贊成してゐる。併し、フェラン氏はモルッカ諸島及びその附近に於けるその諸綴音卽ちモルッカの čenkeh、マカッサル語の čanke、ブギー語の čankeh、タガール語・ビザヤ語の sankó を列擧し、これに支那の雞舌香及び丁香の音を對照してその間の綴音の近似を否定し、支那語よりの傳來を肯はないのである。我等はいまその孰れが正しいかを容易に是非することが出來ないが、唯丁香の我が日本に於て tei-kō 或ひは tyo-ji と讀まれるのは漢及び三國時代の音に由つてゐることを考へ、それと類似する Chengkeh が極く早い時代に支那人より傳へられたのではなからうかとも想像する。併し、南方支那語に由る訛りをも恐らくそれに就ては考慮せられねばならないのであらう。

最後に來るのはピガフェタのモルッカに於ける名とする gomode である。クロフォードはそれを gaumedi と綴り、ヴイルソン氏の牛の骨髓を意味するものでその語源がサンスクリットであるといつた説を紹介した。[註18] 我等はこの語がサンスクリットに出でるとする説には贊意を表し難い。それはモルッカ土人本來の命名するところに係るものであらうと思ふ。併し、多くの旅行者・學者がこの語に關説するところの少ないのは、モルッカに於て少くとも近世に於てはその通用すること他の外來語名に比べて稀

であることを示すものではなからうか。[註19]

さて以上に丁香の諸國語並に原産地の土語名を列擧し、その傳來を簡略に述べたが、然らばそれらの各種の名稱の間には時代的に如何なる關係が存するのであらうか。その前に我等は東西の諸國人が非常に貴重視した丁香をモルッカ土人が如何なる程度に用ゐ珍重したかを知るの必要がある。

十八世紀に土人の生活の精通者であつたランフィウスは「嘗ては土人が丁香を食物として用ひたことも甚だ稀であつた。併し現時並に當時では、化粧用として使用する膏藥中に少量を混じ、ときには煙草にも混ぜた。」と觀察したが、そのいふ煙草と化粧品とに加へて用ゐるのは決して十五世紀以前に遡るものではあるまい。ドアルテ・バルボーザの暗示するところでは、十六世紀初頭のモルッカの諸王及び猶長は回教徒であつたが、殆んど野生的生活をなし小兒や野蠻人の嗜好と慾心とを有してゐる、ジャワ及びマラッカより毎年赴く商人はその低級な慾望を利用して利を博したのである。それ故に、バルボーザの述べるところでは、彼等商人は丁香を購ふに現金を以てせずして、他の廉價の物、例へば銅・水銀・カンバヤ布・陶磁器・ジャワの鐘等を供して、猶長等より莫大な丁香を求めた。「大なる陶製の便器を見て、丁香二十・三十キンタルを與へ」、「一鐘に由つて二十キンタルを供したり。かくしてマラッカより當地（印度）へ」巨大な利得が齎らされたといふ。フィカリュ伯がそれに就て、モルッカに於ける丁香の價格が殆んど有名無實であつたと認めるのは決して不當な說ではない。それ故に前世紀初半のク

ロフォードが、「丁香を産する國の住民がそれを用ゐず且つ省みなかつたといふ事實の充分に研究せられたことを考慮すれば、如何にして初めて外國人がそれを調味料として用ゐるやうになつたかを理解し難い」[註21]といつた疑ひは、先づ何人の頭にも浮ぶのである。またクロフォードが、「我等は大體に於て外國語名が土語名に取つて代らねばならなかつたことに驚かされない。何故なら丁香の價値を傳播した外國人に主なる關係があるからである」[註22]といつた歸結も自らに生じ、また事實はそれを證するのである。若しチェンケが支那語より轉じたと假定するならば、印度傳來のラワンガと共に丁香取引の先達であつた東西兩民族のモルッカに對する活動を表象するものであらう。この兩語名に對照して他の名稱を考へれば、土語ゴメヂーが孰れの時代かに土人によつて命名せられたが、外來兩語名程重要な内容と意義とを伴はず、從つて外國人の渡行して丁香に對する觀念を更新すると共にそれは廢れ勝ちになり、外來語に取つて代られたのであらう。併し、ここに疑問とすべきは、ゴメヂーが果して古代モルッカ諸島種族共通の名稱であつたかどうかといふことである。少くとも十六世紀初半のガブリエル・レベロの觀察した如く各島各種族間に通用語が異なり、意を通ずるに困難であつたとすれば、回教侵入以前には丁香に對する名稱も假令相類似するとしても、各々かなり異なるものであつたであらう。ピガフェタがモルッカの語としてゴメヂーを擧げた意味には、そのいふ如くモルッカの中心をなすテルナテ及びチドールに限定せられることが條件とせられ、後のクロフォードもチドール島にゴメヂーといふ名が殘存してゐると傳

へた。またタムール語に出でてアラビヤ語となり南海に普及したカランブーを前記の兩語名に較べれば、もとより時代が後れるのであつて、回教徒の活動と共にマライ語に入つたことは明瞭である。然らば、チェンケとラワンガのこの兩語の時代的關係は如何に考へられるであらうか。

十六世紀初頭に初めてモルッカを訪ねたヨーロッパ人の諸書が、例へばピガフタの日記にしても、レベロの著書にしてもこの兩者を並記するところより見れば、當時兩語が諸島に於て共に用ひられてゐたことが知られる。併し、バルボーザの著書及びディオゴ・デ・コウトの著書の如きが特にチャンケのみが土人に由つて稱せられてゐると記載するのは、恐らくラワンガよりもチャンケの方が多く用ひられてゐたことを示すのではなからうか。若し然りとすれば、當時チャンケの方がラワンガよりも強い勢力を有すること、換言すれば新しい舶來にかかるか、または根柢深く植え込まれてゐたかのやうに考へねばならない。而して、チャンケが支那語傳來であるとしても、決して新しい音の傳訛ではないことは前にも推測した如くであるから、寧ろ諸島住民間に根深く廣い流通性を有したこと、即ち多年の間にラワンガよりも頻繁に用ゐられてゐたことを想像する方が妥當ではなからうか。併し、この兩者が孰れが早くモルッカ諸島に舶載せられたかは全く知り難い。

ジャワ島の傳說では西曆紀元前に既に印度系人種の移動渡航があり、その後二世紀を隔てて再度の移住が行はれたといはれるから、ジャワ以東の諸島に對する印度系人種の渡來も亦それと同時またはそれ

に近い頃に行はれたと見做すことが出來る。またその後ヒンヅー系の語及び文化を有する種族がジャワ島を支配し、屢々ジャワ以東にその勢力を伸ばしたことがあつたから、その間に於て南方印度語のラワンガがモルッカに植えられたであらう。また前に詳論した如く唐代の支那人にしてもモルッカに赴いて丁香を實見したかと思はれる形跡があり、且つそれは唐以前南北朝時代にも遡り得るかも知れないと想像も出來ないことがないから、チャンケが支那語に傳來するとすれば、その間に於て行はれたのであらう。併し、その孰れも的確な時代を限定することが出來ないのである。それ故に我等に憶測を許されるならば、若し支那語に由來するチャンケが遲くとも七世紀前後にモルッカ諸島に入つたとすれば、ラワンガがそれより早く西暦紀元前後には渡つたのではなからうか。これは頗る危險な想像である。併しそれらの語がゴメヂーに優越し、或ひは併立して早くより存在したことは推察せられやう。

註1、Colloquios. I, p. 318.

2、Dymock, Materia Medica. p. 328.

3、ダルガード氏はタムール語 karámbu または kirámbu、マラヤル語 karāmbu, karayābu, karappa、シンガル語 krābu、ベンガリ語 karabu が十六世紀中にポルトガル語の cravo より入つたとなすが、我等はそれに贊成することが出來ない。

4、Watt, Commercial products of India. p. 527.

5、Pigafetta, op. cit. p. 166.

6、Rebello, op. cit p. 175.

7、Rumphius, Herb, amb.—Watt, loec. cit 所引。

8、Crawfurd, Dictionary of the Indian Islands. p. 216.
9、Ibidem. pp. 101—102.
10、Cinnamomum Zeylanicum.
11、Watt, op. cit. p. 527.
12、Ferrand, Les Poids, Mesures et Monnais de Mers du Sud.—Jornal Asiatique, 1921. p. 35, not. 4.
13、Dalgado, Glossario. I, p. 321.
14、Couto, Dec. IV, Liv. VII, Cap. IX.
15、Couto, loc. cit.
16、Argensola, op. cit. p. 51.
17、Crawfurd, History of Indian Archipelago. I, p. 397.
18、Crawfurd, Dictionary. p. 215.
19、丁香とその鄉土を同じうする肉荳蔻の名に就てもそのマライ語名、サンスクリット名、ヨーロッパ諸國語名の由來を論ずることは丁香の名の時代を限定するに大いに資するところがあらうと考へる。併し肉荳蔻は丁香に較べて產地が幾分廣くマライ半島並に印度にその一種の產するものがある故に、その名の詮議は反つて推究を混雜せしめるから、ここには特にそれに就て說かない。
20、Barbosa, Livro. pp. 371, 372.
21、Crawfuad, Dictionary. p. 101.
22、Crawfuad, History, I. p. 497.

結　語

我等は前提として擧げたモルッカ諸島土人の傳說中に、丁香の價値の發見者にして初めてそれを舶載したものを支那人とし、それに次いでジャワ人・マライ人とすることを知つた。而してこの傳說を以て史上の記錄に對照しその眞僞を確めやうと欲したのである。然るに結するところに於ては果して支那人が最初の發見者であり、舶載者であるかどうかを斷定するまでに至らず、印度移住者或ひはマライ人と並んで最初のモルッカ渡航民族の一であつたといふことを知り得るに過ぎない。この不充分な結果は資料の不足及び我等の研究方法の不備に因るものであるから、將來に於て他の優れた學者に由つて恐らくはそれ以上に確められる機會が生ずるに違ひないと思ふ。

我等は前に說いた如く、古代文化の中心をなす東西の兩國人卽ち一方は支那人に於て、他方はギリシャ人に於て丁香に關する最初の記錄の存在が共に西曆紀元一・二世紀まで遡り得ることを知つた。それ故にこの古代に於て何國人が果してモルッカ諸島よりこの東西兩方面への舶載をなしたかは一の興味ある問題である。また丁香の價値の認識が何國人に先便を付けられたとしても、兎に角この紀元一・二世紀よりも以前でなければならないといふ事實に逢着する。かうして丁香舶載史は我等の未だ觸れることの出來なかつた古代印度の記錄及び文化との關係が究められ、それを介して更に將來に展開せられて行かねばならないのである。